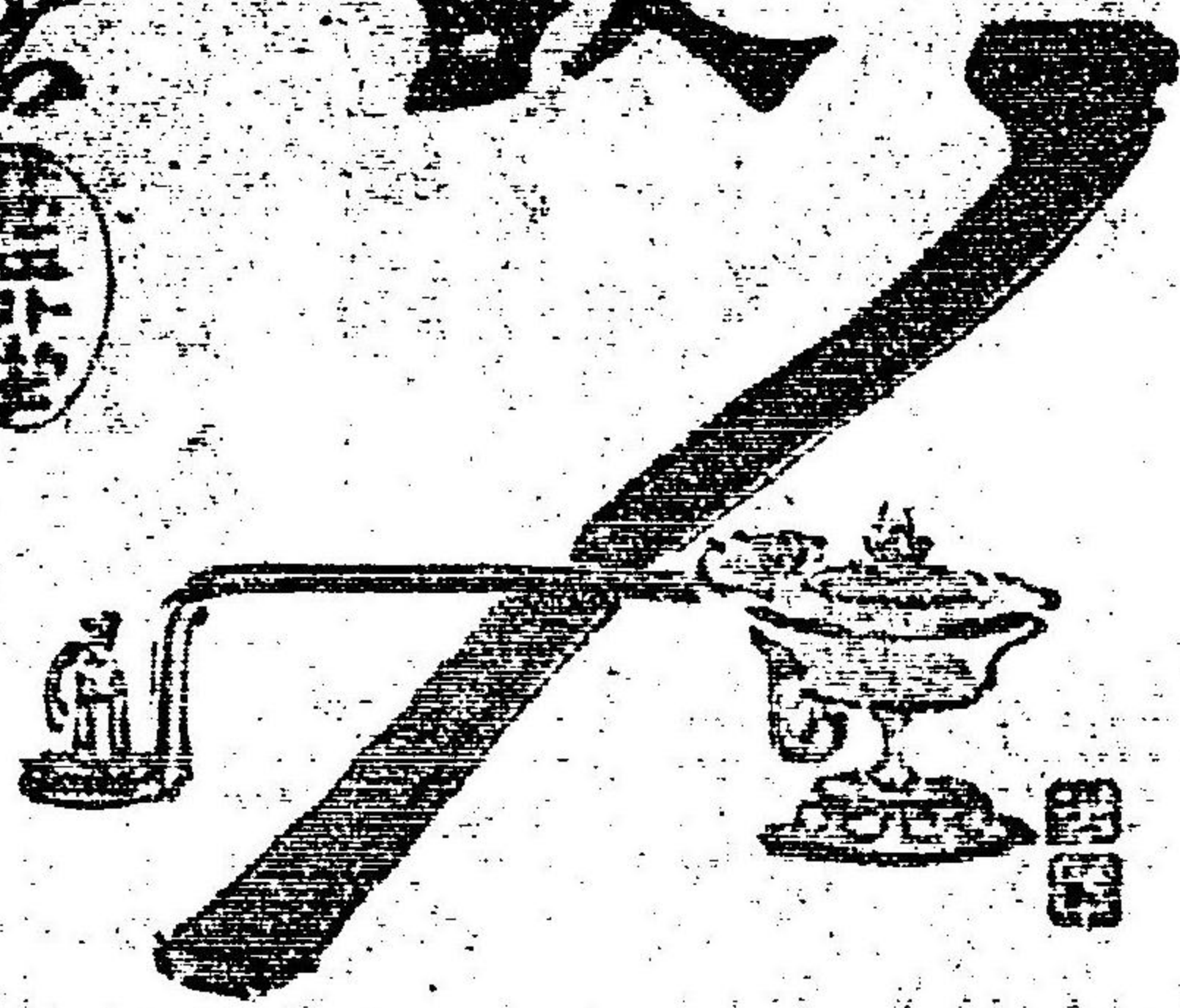


禅学
通俗谈

菅原如庵著



019604-000-0

特61-98

禅学通俗谈

菅原 如庵/著

M33.8

ABG-0384



如庵居士の書

禪學通俗談

著者 如庵居士

特 61
98

禪學通俗談序

教(を)し(こ)といふことは人の爲めに存して道のため
 にあるに非ず。禪學も亦佛のためにあるにあらずし
 て凡人の爲めに存せり。故に人に遠きは道にあらず
 といへり。人間に遠きものならば。いかに最上無二
 の至寶といふと雖も。人間より之をいはゞ實に半錢
 の値なきことなるべし。佛々承傳の最上禪も。實に
 人間の至寶なるか故にしかつたへられたり。若しも
 禪法を佛々より觀し去らは。猶亦泥中の泥の如くあ
 らん。菅原如庵居士は予と近年の交に過ぎず。然れ
 ども其機用風氣は予の深く仰する所なり。居士常に

活禪を説示して縦横自在能く今代の青衿を鍛冶するに堪へたり。予其好著なきを憾とし曾て爲めに敢て慫慂せり。然るに今この編あり。只これ一場の落草談一小冊子に過ぎずといへども。讀み來れば字々素々實切にして寔にこれ近代の名示なり。全く宗教の套風を脱し。簡にして明。易にして瞭。高上の禪機を談して最も近切に最も直用に以て立世の經捷と爲し。以て漸く其堂室を窺はしめんとす。曾て予が渴望せし所の意に符合せり。敢て一言を贅して以て讀者に介すと爾云。

明治三十三年三月

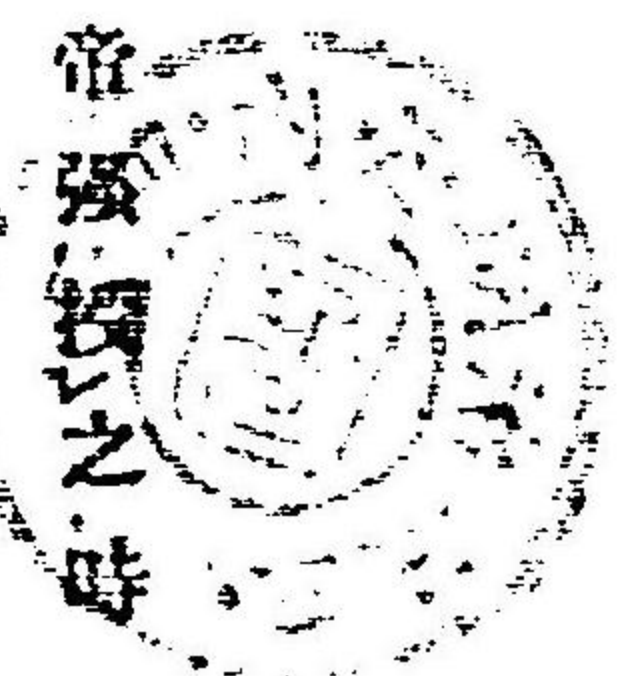
中洲 奏 範 景 誌



生先折不村中

臂斷可慧

口繪引說



魏明帝三詔之祖終不起就賜祖袈裟祖亦不受使三返帝強授之時
有碩學神光者博覽群書善談玄理聞祖往止乃往參承是年十二月
九日夜天大雪光堅立庭中運明積露過膝祖憫之問曰久立雪中當
求何事光泣曰願和尚慈悲開甘露門成度群品祖曰諸佛無上妙道
曠劫難逢豈小德小智輕心慢心所及乎光聞海勵喜不自勝即以刀
刀自斷左臂置於祖前祖曰諸佛最初求道重法忘身汝今斷臂吾前
求亦可矣因以易名曰慧可可乃曰諸佛法印可得聞乎祖曰諸佛法
印可從人得可曰我心未寧乞師安心祖曰將心來與汝安可良久曰
覓心了不可得祖曰我與汝安心竟後祖欲返西竺命門人曰時將
至矣汝等盍各言所得時諸參侍各陳所見最後慧可出禮三拜依位
而立祖乃顧慧可而告之曰昔如來以正法眼付迦葉大士展轉囑累
而至於我我今附汝汝當護持并授汝袈裟以爲法信各有所表宜可
知矣可曰請師指陳祖曰內傳法印以契證心外付袈裟以定宗旨一處

後代三疑菟指吾四天三人言汝此方之子憑何得法以何證之汝今受此衣法却後雖生但出此衣并吾法偈用以表明其他無礙至吾滅後二百年衣不傳法周河界明道者多行道者少說理者多通理者少聽吾偈曰吾本來茲土得法救迷情一花開五葉結果自然成楞伽經四卷者蓋如來極談法要亦可以與世開示悟入今并付汝吾本離南印來此東土爲法求人際會未證如愚如訥今得汝傳授吾意已終乃與徒衆往禹門千聖寺止三日奄然長逝魏幼主劉興孝莊帝廢立之際當梁大通之二年十月五日也其年十二月二十八日葬洛陽嵩州之熊耳山起塔於定林寺後三歲魏使宋雲者率使四城曰遇祖於葱嶺手携雙履翻々獨逝雲問之答曰四天主雲歸具說之門人起壇空棺隻履存焉詔取遺履供養於少林寺梁武帝聞祖紀跡親爲製碑至唐代宗皇帝詔號國覺大師塔曰空觀(支那傳燈紀)云々

畫伯中村不折君爲本書特設圖揮毫讀者諒之

明治三十三年七月

著者誌

禪學通俗談目次

開端

- (イ) 禪は學術なるか
- (ロ) 禪は談下得べきか
- (ハ) ……抑も禪とは奈何なる謂なるか
- (ニ) 禪の由來
- (ホ) ……本談の禪

第一 苦を轉じて樂となし醜を

化して美と爲す事……………三

- (イ) 三界唯一心、森羅萬象唯識所變
- (ロ) 世界自在に變化すべし

第二 物を制すると物に制せら

るゝとの事……………二〇

(イ)(ロ)(ハ) 勝たずんば敗、敗れずんば勝
世界に超脱するは世界を自在に制し得たるの相なり
制せらるゝ處無ければ即ちこれ唯我獨尊なり

第三 大膽大度となる事……………三二

(イ)(ロ)(ハ)(ニ) 外界に凌駕すべき二大能力
智力と意力との關係
世に處するの四事
禪解の用心

第四 利せんと欲せば先づ損せ

ざるべからざる事……………四五

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ) 世界森羅萬象の客となりて主となること
學習と道具の買ひ入れ
無爲而無不爲
才智の弊
禪の極意、奥旨、秘訣、
道具を費はすして、道具を使用する技倆を費へ

第五 臨機應變活殺自在の働きの事……………六八

(イ)(ロ)(ハ)(ニ) 不動智の事
無念無心の大自在
機會の發見
劍道の秘事

第六 大偉人の事……………八九

(イ) 自業自得

(ニ)(ハ)(ロ) 凡夫を轉じて佛となす
佛即大偉人
禪學の修養

第七 坐禪の事 一〇〇

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ) 坐禪に動靜の二行あり
日々世事劇務の處、これ坐禪の好道場なり
山間靜處に禪を修するは活禪にあらず
坐禪の衛生
禪觀方便の事
禪門綱領

第八 工夫修養の事 一二六

(イ)(ロ) 參禪の規
公案

第九 學術技藝の奧妙はすべて
禪なる事 一二七

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ) 立身成業と禪
文學美術(繪畫)と禪
詩歌俳句と禪
政治と禪
商業致富と禪
醫術と禪
工業及發明等と禪
音樂歌舞等と禪

第十 禪門の本旨 一五五

(イ) 佛境界

(口) 以心傳心

生死涅槃猶如昨夢

行誠上人

何事もきのふの夢さきしながら

なほさめかぬる我が心かな

禪學通俗談目次 了

禪學通俗談



一と口に禪學々々といふことであるが。禪は元來不立文字では無いか。然るに禪學の通俗談とは怪しからぬことだ。南岳の所謂説似一物即不中で直參直得でなければ分るものではない。なまなかなこと

をして白瑣に泥穢を塗つてはならぬぞ。箇様なことは禪宗の専門家が口を揃へて言ふ所である。然るに如庵は立派に學問として誰にも學ぶことが出来るといふ禪を談ずる積りである。

學問とは畢竟何ほどの謂であるかといふに。知得の方法に外ならぬ。水の力が何したとか竹の皮は何な案配であるか雷がゴロ／＼鳴ると其後が如何なるとかいふ様に。外界の事狀に就て調査をする。これは知に屬すべき學問であるが。始めは『いろは』を習つて或は楷書行書乃至篆書といふ様にして書家となつたり。最初穴を鑿ることから鋸鉋を使ふことを習ひ遂に工匠の棟梁となる。箇様なことは得に屬する學問である。

禪の不立文字は禪の學問に非ざるを斷つた譯ではない。禪の効果や

其造詣底の有様を妄想の上で分別してはならぬ。又文字の上から造詣の出来るものではないといふことを示したまでである。不立文字、直指人心見性成佛と號喝した達磨が自親に禪經の文字沙汰が有るのを見ても分るではないか。

大抵の學問は皆文字の上から造詣は出来ぬ。農學といふても農書を暗誦して農事の達者とはなれぬ。政治學といふても政治學校を卒業した許りでは天下の政治は執れない。されば造詣至達の上から言へば都ての學問が皆不立文字で獨り禪のみではない。

言を極めて謂はれ。不立文字といふのが即ち立文字で。この所が一つの學問だ。直指人心見性成佛といふのが即ち學ぶことのできる證據である。只その學び得たる所の有様が以心傳心で繪にも文字にも

書けないといふまでいある。その繪にも文字にも書けぬ所に造詣する方便が禪であるからして。説くことも出来る書くことも出来る。劍術の達者が練妙の神技は説く能はず書く能はずであるが。その練妙の神技を獲得すべきことは一つの學問として立派に解ける禪學も亦復是の如くである。

是の如く禪を一つの學問としても決して知に屬する學問ではない。いろ／＼の事を調合したり分拆したりして新知識を腦中に取り入るゝといふ側の學問ではない。直に之に身を當没して體得すべき學問である。されば之を文字の上から直に我がものに仕様といふことはならぬ。文字の上から其體得すべき路途を案内さるゝまでいある。本書は全くこの案内といふ主旨によつて談ずるので。其宗門のため

に法輪を轉ずるの。禪の觀察をするの。非不立文字を論ずるの。なといふ譯ではない。かつ夫々立派な専門書も數へきれぬ程あつて其案内も澤山出来である筈今更のことに及ばぬことであるが。其専門の尊宿英傑がものせられたる典籍は。いつにも六ヶ敷して素人に少しも分らない。講義を聞かんとして之に侍すれば其講義が又六ヶ敷い。では自ら縁遠くなり。志あつても其光明に接することが出来ぬわけですだ遺憾なことである。箇様な注文によつて全く素人風に通俗談をはじめることゝ成つたが。元來禪宗から謂へばソンの無精ものには敢て談ずる要がないといふことじや。六ヶ敷て學ぶに骨が折れるから一と口に分るやうに解てくれなどいふ無徹砲の注文には應すべきでない。抑も禪宗は佛心宗じや。眞實の佛自内證の御境

界のそまゝを傳々承受し來つて居るのである。されば信實當機の者にあらざれば傳ふるとはならぬ。そんな劣機な輩には傳へても分る筈がない。頼んでも傳へもせぬぞ。千百万人に聞きかぢらるゝよりは眞に傳受するもの一人で澤山じゃ。禪宗の見識はまづ箇様じゃ。であるから草々しき方便も設けぬ。分らぬ奴は分らぬのよ。といふ風が見へる。しかるに夫れを手簡に説て見て呉れるといふ注文である。

畢竟するに。一方は最勝無二の佛法として信仰の上に之を説くのであるから勢八ヶ間敷いことをいふ様になる。一方はなにか禪學を行つて人慾上の資益にでも仕やうといふのだから。成るべく薄資本で安く買ひ出し度いといふ態度である。よつて説けないの分からな

いのと噪ぐ。ある高德の説に。兔に角志あるものは相當の結縁となつた譯であるから頭から叱り飛ばして貴様だちには分らぬものだといはずに。手の届くだけの隨機の説法をした方が却て佛の御主旨に合ふたこと。また沙門の職分も盡すわけであるから拙衲はいつもハイ〜と返辭をして臨機の説法を致します云々。

この通俗談はその主義で述ぶるといふのではないが。宗門に依らず。流風に寄らず。本講特成の文字禪を談ずる積りである。何故じゃといふに此の通俗談を讀んで禪學が知りて見たいと思さるゝ志は。何から出て何の位の譯であるといふ的即ち對機が本講に相應して居るからである。されば夫と異りたる眼裏にこの通俗談を對したときは甚だいぶかしい個條があるやも計れぬ。其果して眞際の佛が内證の

大事に契當せんとならば。身を裸となして大火裏に投じ鐵を食ひ砂利を嚙むの用意を要するなり。その時はまた無談の通俗談を談ずることでありませう。

梵王靈山會上に至り、金色の波羅華を以て佛に献じ、請て群生の爲に說法せしむ、世尊座に登り華を粘して衆に示す、人天百萬皆措くことなし、獨り金色の頭陀あり破顔微笑す、佛曰く、吾れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に分附す、汝當に護持して斷絶せしむること勿れ、乃偈を説て曰く、法の本法は無法、法無きの法亦法なり、今無法を付する時法々何ぞ曾て法ならん、併て金襴の袈裟を授く云々(大梵天王問佛決疑經) 諸の比丘、再三佛の住世を請ふ、佛言く、吾が無上の正法、摩訶

迦葉に付囑す、(涅槃經)(舍利弗問經)(大悲經)(付法藏因緣傳)

此事は青天白日の如し、纖毫障翳なし、見る底は直に見る、眸を回すことを勞せず、知る底は直に知る、豈念を生ずることを容さんや、所以に三世の諸佛、歴代の祖師、心を以て心に傳へ、法を以て法に印して、一模に脱出するものはなり(月庵禪師)

祖師西來、教外別傳不立文字、直指人心見性成佛、吾徒苟も前軌を踐まずして黃と説き黒と道ふて閑絡索を打せば、決して教外の宗に非ず、然れども未運の學徒亦信根少し、若しそれ一向に去らば、則ち濼泊するに處なかるべし、曲げて人情に順ふて個の絡索を打し去らん、夫れ趣向する者、十二時中、受用底の一着子、起居動靜、折旋俯仰、阿屎送尿、着衣喫飯、一切處すべて是れ汝が

心の常分なり、他の術を假るに非ず、這裏に於て、自ら退歩體究して、無參無疑不進不退の境界に撞到して碎地に破り曝地に斷じなば、始めて知らん、衆生本來成佛、山河大地收めて自己に歸し、森羅萬象全く他物に非ることを、(南英禪師)

夫れ禪は境界なり、其境界を得ずして禪を説かば、禪即ち言語文字となり去らん、若し夫れ教ならば三乘十二分教は座子の講ずるあり、其専門に入つて之を學ばし、則ち義解の學者と爲るを得んも、但、禪は活法門にして文字言語を超出して所謂懸壘に手を撒して絶後再び蘇る底の時節に到らざれば則ち得べからず、故に古より教を學ぶものは稻麻竹葦の如きも、禪を得る者は、瓜上の土の如し、是れ一回死して再生する大丈夫決烈の漢に非れば做す

能はざる難行の大事なるを以てなり、予は佛教といふ大綱の中に於て、禪の一宗は、徹頭徹尾、佛境界を得るを以て、能事となすことを看破し來れり、たとへば彼名畫師の龍を畫くが如し、其形體具備すといへども、一點眼睛を着けざる以上は死龍なり、纒かに點眼の一筆に由て雲霄に飛騰するの活龍と爲り去る、禪は則ち實に佛教中點眼の一筆なり。(蓋津實全)

或人問へるあり、聞く禪は教外別傳なり、教ふべからずと、然らば一大藏教は、皆これ虚語なりとせんやと、答へて曰く、佛祖の言教は乃ち衆生の妄を破り真に入るの蹊徑を指せるのみ、亦如來の境界を描寫したる圖本のみ、たとひ蹊徑を指示せらるゝも、苟も肯て親しく其蹊徑をふんで、他方に孤露せずんば、安んぞ真に入

るの日あらんや、或は高く九仞の崇臺に登つて、目を縦にして其境界を見ずんば、則ち圖本も亦何をか爲さん、須らく信じて而して後ち行じ、行じて而して後ち到り、到りて而して後守り、然して後ち始めて得とすべし云々(明本禪師)

一切唯心造

行 誠 上 人

下駄あしだ造りかふれば釋迦阿彌陀

かはればかはるものにぞありける

第一 苦を轉じて樂となし醜を化して美と爲すこと

○三界唯一心、森羅萬象唯識所變
○世界自在に變化すべし

苦を樂と變じ、醜を美と化すといはれ。甚はだ希有の奇術のやうであるが。イヤ誠に容易な仕事である。たとへば水を化して火となすといはれ甚はだ希有のやうであるが。其の實誰れにも出来るつまらぬことである。水は酸素と水素との化合物であるからしてまづ之れを電氣などの幫助によつて分解して二とする。さてこの酸水二素を相遇はしむれば即はち三千度以上の熱度を有する猛火となる。而してこの火が即て亦た水となる。苦樂も醜美も亦た是の如く變化自在である。かく變化自在の苦樂醜美をば不變不易として之れに迷惑して居る。之れを凡夫といふ。變化自在なるが故に苦樂醜美本來自性

なしと悟るが佛じや。變化自在の理に因つて凡夫地を一躍に單刀直
 入佛地に入つて釋迦達磨と同躰となる。これが即ち方便門で所謂
 禪學である。水はいつも流れて不定形のものじやと執念すると。時
 に堅硬の晶體となつて方圓鏡鏡の形をなす。では固いものかといふ
 に時には極めて軽く飄渺として杳かに天空に浮遊する雲となつてし
 まふ。更に縁に由つて光となり熱となり力となつて變現極りなしで
 ある。しからばどれが本當の水であるかといふに。何が本當で何が
 虚であるといふことは出来ない。何れも皆水に相違はない。只其對
 所に應じて變化現成するのである。今この對所を取りのけたらば水
 の形相は遂に見ることが出来ぬ。たとへば對所寒なるとき氷と現じて
 熱なるとき蒸氣と化し。中なるとき流水と變じ。極熱もしくは電氣

昔、百丈和尚、黃檗
 希運禪師に問ふ、
 甚れの處よりか去
 來する、師云く、大
 雄山下に菌子を採
 り來る、丈曰く、還
 て大蟲を見るや、
 師即ち、虎聲を作
 す、丈、斧を拈して
 斫る勢をなす師、
 遂に丈に一擲を興
 ふ、丈、吟々とし
 て笑ふ、



に觸れて酸水の二素と現ず。しかるに是の寒熱中等の對所を去つた
 ならば。流水ともならず水晶ともならず蒸氣ともならず又二元素と
 もならず。全く水の形として現すべき相がない。靈々真空となつて
 熱もなければ蒸氣もなく寒もなければ水晶もない。苦といひ樂とい
 ふも亦復是の如くである。苦の苦とすべきはなく樂の樂とすべきは
 無いが。其に對する我が苦と造り出し樂と現せしむるのである。現
 ぜしむるのが我であるから苦を樂と仕やうと樂を苦と仕やうとヤハ
 リ我次第である。我と苦樂とは元と同根で別物ではない。たとへば
 影と形との如くじや。影は形と別になる譯にはゆかぬ。形も影をな
 さぬ譯にもゆかぬ。影と形とは實に俱生俱滅である。して其影は何
 處までも其ありさまの定まつて居るのでなくて一々に其形に従ふの

である。三角の影法師は其形が三角であるからじや。もし之を四角
 にしやうとならば形を四角にせねばならぬ。しかるに己の形が四角
 の僻に影法師が三角にならぬとて腹をたつたり泣たり笑たりするも
 のがある。誠に無理な愚痴といはねばならぬ。アノ奴は誠に憎らし
 い怨めしい奴じやといふて自分の方はトンと氣がつかぬ人が多いよ
 く／＼考へて見ると其の憎らしいとか怨めしいとかいふ事はツマリ
 自分が其原因の一つとなつて居る。しかるに相手をものみ罪するは先
 づ凡夫通途の状態である。腹が空つて居る時に麥飯を喰つて。サテ
 麥飯は旨いものじやと定めて。後には至極腹の飽いときに麥飯を喰
 つてイヤ麥飯といふやつ豹變極まるやつで取りとめのない化物じ
 や。先きには甚旨くて今は甚だ旨くない。と咎めるは愚である。同

じく後から巡査が隨行するのだが。一人旅で懐に多分の金でも持
 つて居るときは實にこれ地獄の佛程に頼もしい。しかるに過ぎぬる
 日に悪しき所業でもあつた時であらばサテはや極樂の鬼ほどに恐ろ
 しく忌はしい。萬事なべて是の如くで苦も樂も醜も美も實はこちら
 の造り出した成績物である。自分か造り出した成績物に對して泣い
 たり笑つたりするのは實に笑止千萬ではあるまいか。然るに世の中
 の間違騷擾といへば皆この自畫自答の沙汰である。人の頭を打撲し
 て置いて其者が怒つて我に害を加ふるを咎めて煩ふ様なことで。萬
 事親しく其因を索むれば畢竟して我に歸して仕まふ。是の道理を推
 して世界は世界の世界にあらずして我の世界であるといふことを覺
 つたがよい。

是の如くであるから我れ轉ずるときこの世界が轉ずる。我れ變ずる
 とき其境界が變ずる。我れいよく腹を立てて抗抵すれば彼れ亦
 ます／＼解けぬこととなる。我れ我を折つて謝伏すれば彼亦遂に和
 ぐといふ工合である。

そこで亦この我を打破すればその世界も自ら打破せらるゝ。我清淨
 なればその世界亦自ら清淨となり。我哀めば其世界亦自ら悲哀の
 世界となる。

この處が禪學の方便としての大秘訣じや。おのれ大日如來の地を成
 ずれば一切塵穢の不淨世界悉く變じて大日本尊の萬徳となる。眞
 言宗に談ずるも同じくじや。自性清淨三昧に入つて業我を斷し來れ
 ば豁然として山河大地すべてこれ佛と異らざるを證し金剛不壞の佛

身を成じて所以大悟徹底佛に内證の秘事に合ふといふとに成る。さてその業我とは何もの。自性清淨三昧とは何ごとであるか漸々に述べます。

法 身(新勅撰)

千觀法師

法の身の月は我が身を照せとて

無明の雲の見せぬなりけり

第二 物を制すると物に制せ

らるゝとの事

○勝たずんば敗、敗れずんば勝

○世界に超脱するは世界を自在に制し得たるの相なり

○制せらるゝ處無ければ即ち唯我獨尊なり

二人相敵して互に白刃を閃めかして生死を争ふときは。この二人の間にて勝つと負くるとの二つより外に決し様はない。其何れにもせよ。勝たざれば即ち負け負けざれば即ち勝つ。今即今の世に於て誰人も亦是の如く白刃を取て敵に對して居る趣である。ギヤツと生れてこの世に出ると直様世界一切の森羅萬象は之に向つて侵害を逞うし來る。氣候が寒い或は暑い、赤坊が生れたから暖く好い頃の氣候にして置くといふ自然の方に遠慮はない。そのままにして置けば風邪をひくとか或は其他の病氣を起す。よつて夫々の正當防禦をしなければならぬ。漸く大人となるに伴ふていよく益其の障敵が増大する。昨日飲酒過たために今日は病人となつて人間の役に立

たない。一寸と言ひ損ねた所から折角の大事が滅茶々々になりかけた。などいふ卑細なことに至るまで皆油断をして天地自然の敵に打ち勝たれた有様である。少し油断があると直ぐと切り込まれる。家を構ふれば火災の患がある。しからは焼けない様にど石造りなどにする。地震といふ奴が睨んでをる。海邊では海嘯がおそろしい。平地には暴風がある。山間は噴火爆裂あるひは雷災が多い。時には劇烈の傳染病が軍鼓を鳴らして攻せよする。學術技藝の競争軍もある。生存軍が肉迫する。貧乏軍も應援する。少し櫓が狂ふと病氣に取りつかれる。學問も得途げられぬ。技藝も習ひ得ぬ。損失々敗が累る。生活までも覺束なくなる。竟に自分一人。生きて居る丈けが六ヶ敷なる。トウ／＼大敗となつて敵軍に捕擒せらるゝといふ譯になりま

す。この例をもつと狭ひ所にして。たとへば人と人との間のみならず。観察しても同じく敵立の有様である。姚嬋嬋の美人が若し君の爲めに身命を捧げんと申し込んだら如何である。まづ大抵の人は向ふ通りを通つた許りでも手に乗つた物を置いて首を長くさし出て見るか甚しきは外へ出てボンヤリ立て後ろ姿を見て居るといふ程にある。であるから之に接近し言を交へかつ身命をも任すといふに至つては決死の大事と抱負して居つたことも親のことも君のことも國のことも忘れて仕舞ふであらう。この所一矢直に敵に其本城を奪はれた有様である。人には十七八歳より廿一二歳に至る尤も大切なる練習時代がある。その時代はこの障敵のために殆ど眼ませられぬ者は無い程である。未だ戦はず只敵の陣立てをして居るのみであるに早

く既に風を望んで降伏する。たゞへば好男好女が其人に放蕩せよ淫
 樂せよと勸誘もせぬ先きに。早く既に自ら其腦中を之に傾けて其障
 魔の中に陥らんとしてある。身を提して市に歩めば。耳に入り目に
 觸るゝ所悉くこれ我が障敵の格となり得ざるものは無い。妓樂を張
 つて我をさし招く。これ我が勤學勉勵の光陰を殺ぎ不撓不折の堅志
 を熔蕩せんとするもの。山海の美味を羅ねて杯を舉げて我をさし招
 く。これ我が食欲に乗じて胃の府を陥落し酒は腦中に進軍して更に
 雜多の内患を播種し惹起せんとするもの。或は衛生の方面より或は
 風紀道德の方面より或は智術經營の方面より隙のあり次第にドシド
 シと侵軍せんとしつゝある。實に劍呑千萬の世の中ではあるまいか。
 火を見て火災を思ひ人に逢ふて賊を思ふといふ諺はこんな譯から起

つたのであらう。

さてか様に人は森羅萬象の敵軍に取り圍まれて居るのであるが。そ
 もくこの森羅萬象が昔しの昔しより我と仇同士であつて。厭でも
 アウでも敵對せねばならぬものかといふに。元來はこの森羅萬象は
 我に歸すべきもので早く言へば血を分けた親類である。最も睦む
 最も親しくなければならぬ。然るにいつのころかフト不和合となつ
 て一切森羅萬象が我と相凌ぎ相迫る様になつたのである。そもく
 其原因は何いふ所にあるのであらう。

我は元來本家である森羅萬象は分家である。本家が本家らしく分家
 は分家らしくすれば先づは不和の起るべき筈はない。然るに此の本
 家が分家を他人扱ひにして本家の本家たる本分に背いた所から分家

も漸く他人根性となつたものと見へる。そこで本家は分家を削つても利を食りたい。分家は本家の疲弊を顧みず手の届くだけ吸ひ取らうとする。我と世界との關係まづはカウ言ふた有様である。

三界唯一心、森羅萬象唯識所變、といふ。一と口にいへばこの世の中のありとあらゆる事は皆人々が勝手にその心から造りだした物であるといふことである。前章に於て大かたは其道理の分る筈であるが。更に言を換へて手簡にいへば。現成物はすべて結果である、結果にはすべて原因がある。この世界は結果である。其原因は都べての所作である。而してこの世界を分てば其世界に對して居る者と之に對となりて居る境(即ち世界)とである。其對する者が其境に向つていろ／＼に所作し去就することが直ちに原因となつて。復た相應

の主と境とを産み出す。その主と境とは亦迷惑の交渉をなして更に別の主と境とを造る。是の如く展々して止む時がない之を輪廻といふ。故に即今この我とこの境界即ち世界との有様はモト／＼我が過去の主境交渉より産み出したものであるといふことが分る。詳かに其道によつて業感緣起の説を聞き給ふべし。是の如くこの世界は我の建立したものである。故に前章に於て言ひたるが如く我轉ずれば世界亦轉じ我滅すれば世界も亦滅し。俱生俱滅して異体同根である。その異体同根のものが仇であるとは奇怪至極の沙汰である。その親しかるべきを親しからず同趣なるべきを異別ならしめたるは何者であるかといふに。是また我といふもの、仕業である。森羅萬象が敵でも何でも無い。我が方から之を敵ならしめたのである。た

とへば白刃を振つて切つてかゝつたとしても我が體に一寸の隙も無かつたならば切ることば叶はぬ。森羅萬象が攻めつけて厭でもアウでも手込めにして侵害するといふのではない。大方は我が方より其侵害を受くる様に出向いて往くのである。そこで森羅萬象を理せんとするよりは只この我を理せよといふ大秘訣が了解する。心外に法を求むる勿れ、佛を見んと欲せば近く退いて自心を觀ぜよといふも茲である。

さて。現今の人々は如何にその世界と交渉しあるや。如何にその境界萬物に接待せるやといふに。今の侵害の防禦で大擾ぎである。一切の事物に制せられて奴隸となつて居るが多い。黄金があれば直に黄金のためにこの心を奪はれてこの心身を勞役する。美人に接して

は直に美人の爲に心を奪はれてこの心身を勞役する。この心を奪はるゝが故にこの心が自分の自由にならぬ。その物に執着するが故に其物を得ざらんとすれば愁苦して恐懼の念を植ゑ。更に種々の計設をなして禍の上に禍を重ねるといふことになる。喜ぶべからざるを喜び、悲むべからざるに悲んで。常にその境界のために左右せられて。聊にても獨立不動の態度にあることが出来ない。

是の如く我れ境界の奴隸となるは。境界を其の儘の本性として我之に従ふて爲めに我人慾の私を偷安満足せしめんとするからのことである。境界はもと我が心と同根にして本來自性なしと悟らば。別に境界のまゝになるもならぬも無い。境界もし我を斃さんとせんに我よく之に勝ちて其侵害を受けずあらば即ち境界我が爲めに敗らるゝ

のである。
 喜事外ぎじの外にあり。然れども我をして喜ばしむること能はず。逆事外ぎやくじの外にあり。然れども我をして怒らしむること能はず。哀樂愛憎あいかくあいそう亦是の如しと云ふ態度たいどになつて見たならば。この人には喜もなく怒もなく乃至哀樂愛憎も無い。到る所向れいこうふ所八面玲瓏、朗々として無碍むがいである。一念不起いちねんよきのとき天地脱落たうちらくして我もなく世界もなく清淨無碍しやうじやうむがいの大法身と相應さうおうずる。一念迷惑めいごくすれば六界現起りくげんして苦樂の障しやう立たちに生ず。其一念不起清淨無碍の心地に住して聊かも境界のために動亂せられざるは。即ち一切森羅萬象のために制せられざる有様で。之に即ついて其儘そのま一切森羅萬象を制し得たるわけで仔細もなく能主唯我獨尊なうしゆいごどくそんの佛である。是の如く世界森羅萬象の奴とならずして世界森羅萬象の

譬へは人あり。塊を以て獅子に擲つ。獅子は人を逐ふて、狗は其塊を逐ふ。直に根本の理を明らむるものは獅子の如し。徒らに言句を追尋するものは狗の如し。生死の根本を解脱するこそ亦復此の如し。



主となり。制せられずして自在に我より之を制するものとなるを名けて成佛といふ。禪學は實にその單刀直入の迅速法である。

一微塵出大千經(華嚴經)

行誡上人

ちりのよと拂ひ捨てしそかきりなき

法もそこよりあらはれそする

第三 大膽大度となる事

○外界に凌當すべき二大能力

○智力と意力との關係

○世に處するの四事

○禪學の用心

度量といふものは何いふことであるかといふに。いつなる刺戟に際會しても坦然(オチツク)として其念を動じない姿である。膽力といふは強敢にしてよく當るので。其意の決したるまゝに行て撓まず畏懼せぬのである。其坦然として不動なるは一念不起と相應せねばならぬ。また其強敢よく當るは一向三昧とならねばならぬ。禪は一念不起中に於て自在に一向三昧を成ずるの手段である。然らば禪とは實に度量膽力の成就法である。度量膽力といへば甚だ其意が狭い様であるが實は至大度量至大膽力が佛の金剛不壞精進勇猛の姿である。拙子曾てこの事に就て言ふたことがある。

外に諸般の形相あらば内に數多の觀念ありて。一物一心相ひ双提せざることなく。故に外物變ずる時は心意之に伴いて變せざるを

得ず。一事起れば一心生じ一物轉ずれば一心亦轉ず。夫れ此の如く吾人の心意は外界の轉變に應伴して毎に形と影との如く然り。是の故に砲雷彈雨を見ては懼れざらんと欲して能はず。高貴賢傑の前には畏れざらんと欲して能はず。怪奇異險に當ては畏れざらんと欲して能はず。又幸榮功譽には悦ばざらんと欲するも。自ら心狀快喜に化し。死別離隔には哀まざらんと欲するも自ら心狀哀傷に化するが如く。心意は外境の事故に左右せられ。自由自在に引き廻さるゝが故に遂にみづから自己の心を制する能はず。畏々として益怯漢の廢奴となる是に由て考ふれば。膽力養成の要條は。此の外界事故のために心意を左右せられざらんこと。即ち坦然として不動に住する底にあり。

いかにせば心意は境界の變化に伴はざことを得るか。心底湛靜不動なる時は境界の變化に伴ふことなし。心底の湛靜不動ならんことを欲せば須らく三界超脱の活禪法によらざるべからず。

度量と膽力とは躰と用との如くである。度量がなくては膽力がない。故に膽力の養成法は畢竟して度量の修養に歸する。佛の大機大用大自在の活動は皆靜寂の三昧即ちいかなる事物も動かし亂すことの出來ぬ一念不起の心地より湧き出るのである。この膽力と度量に就ては時勢と云ふ紙面に於て左の如く書いたことがある。

坦然として動かす之を度量と云ふ。強敢よく當る之を膽力といふ。一は其躰一は其用にして畢竟別物にあらず。度量あるもの必ず膽力あり。膽力あるもの必ず度量なくんばあらず。今一に之を

意力と名く。よく物を觀事を察し微を啓き密を顯すは智力なり。外界に渉交して其意思を實踐決行するものは意力なり。喜怒哀樂の境裏に於て吾人の作爲は是の二つの力を出でず。智と意と情とは吾人が心性の三大目にして。其智力と意力とは、外界に凌當すべき二大能力なり。

吾人はこの二大能力によりて以て宇宙に大自在なるべきか。果して然らばこの二大能力の本性、關係、發育、修養の講究は實に劈頭の要件ならずんばならず。今は其意力即ち度量及び膽力に就きて聊か思ふ所を謂はんとす。

殊に今代、人の通患として。知と行と全く分立し。獨り知に專にして行は全く與からざるを見る。是れ恐くは知つて而かも之を

行はざるにあらざして。知ると雖も行ふ能はざるなり。其意力死壞して活潑々地の元氣を失へるに因らんのみ。たとへ智はよく宇宙を悉さんも踐行の力なくんば亦何をか爲さん。只是れ知るのみにあらば。世界は畫餅と異ならず。只是れ黄金の夢に過ぎざるのみ。しかるに獨り知を貯へ才を養ふに切にして。是の大事を忘るゝは何ぞや。人はこれ物を容るゝの倉庫にして靈々自在の活物にあらずといふ乎。曰く文明の國其兵必ず弱し。才子必ず多病多疾。

大膽は愚にあらざれば爲し得ずと。果して然らば文明は喜ぶべきにあらず。嫌忌すべきものは才子にして。仰で貴むべきものは愚者なりと謂はざるべからず。豈夫れ然らんや。所謂文明の兵弱きは智育偏高の弊にして意力痿縮の結果たらんみ。才子の多病多疾

も意力を忘失して外物利用の智的分際おんぎに心を奪はれたる結果のみ。踐行活動の力なき智識は。これ書籍と撰えらばず繪畫くわいかくと異らず。寧ろ行ふ所ある愚者ぐしやに如かざるなり。

智と意とは相反さうはんの性を以て對し。智力旺なれば意力退き。意力旺なれば智力衰おとろふると爲し。愚者に大膽者多く。智者に躊躇ちゆうちゆうを免れずといふものあり。是れ甚しき謬見びやうけんのみ。請ふ之を聞け。人の世に營事えいじするや。四種の位格ゐかくあり。曰く外界がいがいに隸伏れいふくするもの、曰く外界がいがいを利用するもの、曰く外界がいがいと獨立どくりつするもの、曰く外界がいがいを制御せいぎよするもの、是れなり。而して勇猛ゆうまうの元氣げんきは其制御せいぎよの格かくに存し。恐怖の情は隸伏れいふくの格かくに甚しきものなり。之を智と意とに配すれば。前の二者は智の分際なり。後の二者は意力の分際なり。智は隸伏

に陥り易しと雖も。是れ智尙ほ明あきらかならざる爲めのみ。智深明しんめいなれば其理に通ず。理によりて之を利用するに於ては必ずしも恐懼きようぐの發すべきにあらず。更に智力の深確明徹しんかくめいてつを極めんか。遂に恐懼の恐懼すべきなきに至り。自ら意力の旺盛おんせいとならんのみ。されば智と意とは相伴あひたせふべきものにして背馳はいしすべきものにあらず。所謂兵弱かるべき文明は。眞個しんこの文明にあらずして。外界隸伏れいふくの文明ならんのみ。多病多疾の才子は。眞の才子にあらずして。外界隸伏れいふくの小才子ならんのみ。決行に大膽なる愚者は。これ愚者にあらずして。獨立どくりつもしくは制御せいぎよの位格ゐかくにある健兒けんじたらん。

天地を以て一朝いつちやうとなし。萬期を須臾しゆゐとなし。日月を圓窓えんそうとなし。八荒はつちやうを庭衢ていことなし。行轍こうてつ迹なく。居まよに室虛しつこなし。天を幕ぼくとし地を

席とし。意の如く所を縦にすと。今の人果してこの意氣あるか。この意氣に乏しきのみならず。斯の如き語は遂にその耳に入らず。曰く、是れ大言壯語のみ。智識暗昧なりし時代の放言のみと。然り大言壯語に過ぎず。智識暗昧なりし時代の放言なり。然れども是の如き語を發するの意氣は如何。その意氣ありて其の業の成效せしは如何。今代の智識を以てして之を行ふにこの意氣を以てせば如何。意氣の大にして壯なるは蓋し度量膽力の相にして。所謂意力の震立を示すものなり。

今の人も亦大言壯語せざるにあらず。然れども多くは是れ口耳邊の大言壯語に過ぎず。偽ねて而して大言壯語せんには。三才の童子も亦た之を能くせん。倡優もよくせん。鸚鵡も之を能くすべし。

大心の言知らず大言を成し。壯氣の語おのづから壯語をなすに非れば之を大言壯語とは謂ふべからず。しかれども大言壯語の毎に舌上の技なるに慣れて。今はこの語は戯談を意味する辭詞となれり。是の故に動もすれば曰く。これ大言壯語のみ。言ふべくして行ふべからずと。然り貝小の心を以て事を行ひ。人を無氣無情の器械視するものは。當にこの大言壯語に驚愕すべし。震天動地といはれ。其輩必ず天の震ふべからず地の動かすべからざるを争はん。陽氣發する所金石を透すといはれ。金石の穿工をば朱子に依托せんとするならん。曾て詩人が白髮三千丈といひたりとて。呵々として詩人の妄を晒ひたる大愚ありきと聞けり。知らずや、言ふべくして行ふべからず等の語は。物の性、事の理を查定するが

如きとき。はじめて用ふるに堪ゆべきに情感、氣力、の詞となりて語を成せるをも亦之を以て謂はんとす。是愚の甚しきものと謂はずして何ぞや。

抑も大度量大膽力即ち大意力は。生存立世に於る四種の位格に於て。其外界制御の位格に契當せるの謂にして。隸伏は勿論。物質の利用、不關獨立等に秀卓せる最高位格にありてはじめて見るべきの大用たり。故に其坦然たること身心を慮らず。前事後事に煩はず。其強敢なること自在に心僻情勢を制御して意の如くあらしめ。要して之を行ふべくあらば。火に入り刃を踏み。焚熱も堪ゆべく割截も忍ふべし。今の大度大膽を以ていふものは。蓋し曖昧にして危を察せず。儉を知らず。盲者の淵に進むが如きの類なり。

首山和尚
竹篋を拈
して衆に
示して曰
く、汝等
諸人もし
喚て竹篋
さなさば
則ち觸る、喚んで
竹篋さなさいれば
背く、且く道へ、
喚て甚麼さかなさ
ん、



らざれば情慾勃旺して獸畜の如く甚しきより。所謂鹿を追ふて目に大山を見ざるの類のみ。前者はいふに足らず。後者は果して之を大膽といはんか。其情慾を克己制伏する能はざるは如何。おのれを制し得ず豈何ぞ其他を制し得んや。自身に小心恟々たるもの乃至一個の名利に汲々たるもの。豈安ぞ其他に於てのみ特り坦然綽々たり震然勇呼たることを得んや。

禪學といへば甚だ六ヶ敷ことに聞ゆるが。之を要するに一切森羅萬象にこの心を制せられずして。一切をこちらから制御するといふことに過ぎない。この一心を固く持守してすべての事にこの心を奪はれぬといふが禪學者の用心である。

題しらす(後拾遺)

源空上人

我この池水にこそ似たりけれ

濁りすむこと定めなくして

第四 利せんと欲せば先づ損せざるべからざる事

- 世界森羅萬象の客ならすして主なる
- 學習と道具の買入れ
- 無爲而無不爲
- 才智の弊
- 禪の極意、奥旨、秘訣
- 道具を費ばすして道具を使用する技量を費へ

利せんと欲せば先づ損せよとは權道の言ひ草の様であるが。今こゝ

にいふのは夫と少しく趣が違ふのである。大捨即大取、大損即大
 利といふことである。暗といふことが去つて仕舞ふと同時に明が現
 ずる即ち去暗即得明である。煩惱が盡きて仕舞ふと同時に菩提を證
 する即ち斷煩惱即證菩提である。一切に心を奪はれぬと同時に一切
 を奪ふに差し問へがない。無心即自在である。そこで明を得んとし
 たならば其明に貪着なく其暗を去る。菩提を證せんとしたならば其
 菩提に貪着なく其煩惱を斷ずる。一切に自在ならずとしたならば其
 自在に貪着せずして一切の心を攝めて無心に歸するといふのであ
 る。然して茲に目の暗む所があるから眉に唾して大に注意警戒せね
 ばならぬ。その明を求め菩提を證せんとし大自在ならんとする心は
 抑も正直正銘の本心であらうか。こゝ一番詮議に及ばねばなるま

い。元來清淨無垢の法界に明暗を見、迷悟を差別し、碍無碍を觀ず
 るのが大間違ひである。その大間違ひを要素として其暗を去るとか
 其心を攝するとかいふが既に疾に疾を累ぬるのである。そこで
 禪ではこの明も暗も同轍に貪着しない。煩惱も菩提も一所に棄て、
 取らぬ。得夫是非一時に放下するといふのである。しかも茲が去暗
 即得明、斷煩惱即證菩提である。只其明を明とすると其明がやはり
 迷界の明である、其菩提を菩提とすると其菩提がやはり煩惱の中の
 菩提である。しかるに動もすれば明暗迷悟を差別しておのれ暗界煩
 惱の中にあつて勝手次第な戲論を弄する。そこで身を泥土の中に陥
 らしめたと同じく、出でんとして益々其深きに陥ることとなる。
 たとへば清淨廣潤なる一室中に甲乙丙の三者眠れりと定む。甲は

臭穢不淨にして腐爛蟲蛆を生じ避くるに途なきの夢境にあり。乙は
 大火聚の中に陥り身まささじ焦爛せんとするの夢境にあり。丙は櫻花
 爛熳雲をなして四圍の林に咲き七寶莊嚴の大樓閣にありて妓樂遊興
 すと夢む。元とこれ廣濶なる一淨室、臭穢の厭ふべきなく火聚の苦
 しむべきなく遊興の樂むべきものあることなし。然るに夢にある者
 は無い所ではない。現前に臭穢に接し、火聚に觸れ遊興に遊ぶ。こ
 のとき夢のさめたる一人ありて其夢見る者に説いて。諸子、諸子が
 苦樂ともにこれ眞實にあらず。眞の安樂を得て大眞理に合せんとな
 らば宜しく其夢なることを悟り心を攝して其境界に迷ふこと勿れ。
 といはゞ稍心づく所もあらんか甲は無穢清淨ならんとを希願し、乙
 は無火清涼の所を希願し、丙は益其興の旺ならんとを希願するので

あるから。その希願する所の清淨も清涼も遊興も共にこれ夢だから
 捨て、仕舞へといはれては寔に張合ひの無い嘶しになる心地がせら
 る。そこで彼の夢見の人々は。イヤ左様なことならば御免を蒙る。
 吾々は只この不淨が少しでも清淨になればよいのである。この火が
 少しでも向ふの方へ往けばよいといふ様になる。そこで夢既に醒め
 たる人即ち其説者は方便のために之に應じて曰く。イヤ諸子の謂ふ
 所亦叶ふ。醒夢の大法は實にその不淨を轉じて淨となし。其火を轉
 じて水となし。一日を千秋となし一花を萬花となすの妙術であると
 箇様に説示する。しからば我々一心にその大法に歸命して其希願を
 満足すべしとはじめて法を聽き淨行を修めやうといふ氣になるの
 である。今の悟のために迷を厭ひ。明のために暗を避けんとしつゝ、

ある。佛法修業の者は夢の中に又夢を見やうとして居るので。中にはこの夢が醒むるとは甚だ残り惜しいことであるなど思つて居るといふ。

禪は一切の智解寸毫の情識をも許さぬ。蕪直に得失是非を放下してこの命根を截断し一度死し去つて絶後に蘇すといふので。ナマやさしい覺悟では得遂げられぬ。涅槃の門を拳倒し生死の海を跳飛して單刀直に如來地に入つて身を三千大千世界に現ずる頓證頓悟の法門だから。狐疑鼠議の意氣地なしの得て窺ふべきもので無い。

しかるに今の人。この有様を凡夫根性によく了解して而して後にやつて見やうといふのである。たとへば夢見るものゝ夢の中に夢の外を考へてよく夢外醒境が了解してからやつて見やうといふが如くで

ある。そこで種々の疑問が湧いて出て。この相對界を離れて絕對界に冥合するのであらう絕對に冥合する果して何の安樂かある。などいふ。この輩は無心に歸するといふを聞いて沈香もたかず屁も出さぬといふことと思ひてチツカラ面白味のない境界じやなどいふ。夢が醒めると夢の中の花も月も火も水も無くなつて仕舞ふからなに一物もないと思ふもつともではあるが。大悟の曉にはその夢のまゝが無くなる譯でもなくして夢を離れて遊戯自在になるといふことは夢の中には分らない。夢の中に醒境が分つたら既に夢中ではない筈じや。

禪は退歩の學である。退歩といふも實は真理には大進飛歩せるのである。たゞ今日の學問と比較すると退歩の様子となります。また本

未を以ていへば禪は直接根本の學問で今日種々の學術は方便枝葉の學問である。何が故にとならば禪は人間終局の目的に一致するのであるから直接といはねばならぬ。現今幾多の學術は悉くこれが方便の方便と次第に枝葉をなして居る位格にある。この事は後章に至つて人間終局の目的を述ぶる條下に詳にすべし。扱て禪は一切物を知得せぬ様にせよ。知得してをることは忘れて仕舞へよ。かくのごとく教へる。その意を知らぬ者が之を聞いて大方は呆れかへつてしまふ。吾々は實に日々時々事物の理を觀察して。一つでも善き道理をわきまへたい半分なりとも新しき智識を得たいと汲々孜孜として。或は師を求め或は校舎に入り或は試験に就きて片時も油断をせぬ様にする。果して新事實を發見し新理論を證し得ば即ち世を

利し己を利し現然として其効績を見ることが出来る。しかるに物知りとなるな早く忘れてしまへと言ふは實に滅法界の亂暴といはねばならぬ云々。まづ大抵の人がかくの如く抗議することであるが。是は深く其意を知らぬからのことである。老子が學は日に益す、道は日に損す、之を損して又損し爲すことなきに至る、爲すこと無くして而も爲さしるなし。と言ふたは甚だ禪に近い。されども其實は禪と大に異なる所がある。道教は虚靈を尊尙して人心も之に一致冥合せしむべく説くものであるから。眞實に有るものを虚となし實なるものを損して虚虚ならしむるのである。禪は最初からこの天地の有様の虚虚なるを知つて一念を動ぜざるのである。故に敢て其無に歸して虚を守るといふは禪の却て思む所である。さりながら其退歩の

趣は全く一つである。退歩といふは愚となり物忘れをして木石の如くなれどにはあらず。すべての事物の貪着を離るゝを謂ふのである。言葉を換へて謂へば都ての事物に支配されて居る僻習を脱離するのである。この僻習を脱すると同時に我は大主格となつて都ての事物を支配する。通途の爲すといへることは一切の事物に支配せられて居る有様である。我大主格となつて一切の事物を制御すること。眞の爲すと謂ふことなれ。そこで爲すこと無くして而も爲さざる無しと云ふことになる。制せられて爲すといふことが無くなると自分の自由に爲せぬといふことが無いこととなる意である。芝居が大好きで相撲が大嫌ひだと云へば立派に自分から取捨して居るやうに聞へます。しかるに其實は自分から取捨するなんといふ立派なことで

はない。芝居の方から引張られ相撲の方から衝き放されたのである。自分がもしも自由に取捨したのだと云ふならば。試みに更に自由に取捨して芝居を大嫌ひに相撲を大好きにして御覽なさいといふても恐くは出来ない。固より我から芝居を大好きにしたのでなくて芝居が見たくてならぬといふ心を引き出されたのであるから取りかへることの出来ない筈である。そこで常に毎に芝居のために光陰を欠せられたり、散財をさせられたり、苦しい思をしたり、仕事を出かし損ねたり、勉強を怠つたり、人と争ひまでもさせられたり、する様な始末を演じて居る。たとへ義理を欠いてもこの芝居は見ずにはあられぬ、少し身躰の工合が悪いがあの芝居を見ずには居られぬ、といふことになつて此の一身が芝居に好い様に引き廻されて居る。

萬事かくの如くの境界に在つて種々の作業をして居るから此の世に生れて來といふは即ちこの世に丁稚小僧に奉公住をしたと異らぬわけとなる。然して猶ほ人はこれ萬物の長など言ふて己れの丁稚小僧たるを知らぬ。この丁稚小僧を一度轉ずれば元とこれ平等の一人前で即ては一個の主人公である。

利せんと欲せばまづ損せよとは。この奴隸心の貧着心を損滅して自在大安樂の大利に合せよとのことである。尙言を換へていへば世界森羅萬象の客とならずに主となれよとのことである。禪學の要は實にこの主客の外にはない。禪の極意、奥旨、秘訣は人をして其客位を脱して主位に入らしむるにあるのです。

柳は緑花は紅で、昔も今も男の眼にも女の眼にも南の方からも北

如意

僧あり、趙州和尚に問ふ、

如何なるかこれ祖師西來の意、

州曰く、庭前の柏樹子。



の方からもヤハリ柳は緑花は紅である。もしも禪學が柳は緑花の紅を變化して花の緑柳の紅とする様なことであつたら實にこれ天魔外道の一類である。凡夫の青黄赤白の色聖者のやはり青黄赤白の色である。しかるに同じく柳は緑花は紅の有様に對して客が向ふと主が向ふと天地懸隔の差異を生ずる。こゝが成佛不成佛の差異である。たとへば一家の奴僕となつては其家の器財寶物を保護しても。其器財寶物のために保護の役にあてられたのであるから醜美善惡の觀は他の者と異らねども之に對して自由の分がない。然るに一朝その家の養子となり主人公となつては。同じくその器財寶物は異らぬことであるが其保護乃至一切の處理方に於て大に奴僕の折柄とは趣を異にして。自ら之に對して自由の分がある。迷へる凡夫とはその奴

僕わがの如きものである。悟れる聖者とはその主人公の如きものである。今もしこの奴僕があのれ奴僕であるといふことを忘れて只この器財を集め貯へて山をなしても。之に對して自在の分なく其主人公となり得ずあらば。寔にこれ徒勞のことではないか。少しく智あるものはその器財を貯ふるに先んじて其主人公となることに心掛ける。一度いちど主人公となり得てよりは集め來る所の器財悉くこれ自個所有の物となつて自在自由であるからである。しかるにこの主客のことを忘れて一に只器財のために汲々として其れを自分のものにするのか將まさに其れのために保護の役夫となるのであるかは分らない人が多

毎日々々ペンと筆記紙びきしを抱へて學校に通ふて道具の買い出しはオ

サく／＼怠りないが。この道具は自分の所有にするのか將たこの道具のために自分が役せらるゝのか分らない。今代は日一日と學者の殖えることであるが。この學者は其學問が果して自己の物になつて居るや否やはよろしく詮議すべきである。只道具ばかり澤山所持してをつてもヤハリ雪隠大工はどこまでも雪隠大工である。たとへ小刀一挺でも左甚五郎は名手である。千百の學科に通じ博識強記之を叩いて其音を得ざるはなしといふても其儘では只本箱の活きてをるのである飯を喰ふ字引といふに過ぎない。然るに世にはたゞ物知りを希ひ才智聰明を尊ぶは其常となつて居る。才智だの聰明だのといふのが畢竟してこの道具に過ない。道具は固より物を作るに必要であるが物は元來道具が作るのではない。しかるに物をつくるに道具が

作る様に考へて道具任せにすると削り込んだり切り過ぎたりしてトシダ失策をすることである。人の智識や才能は人が境界に對して處理すべき一種の能力であつて至極の必要ではあるが。之を恃みにして之を用ひ去る所の我を忘れて居ると其れが爲めに怪我をする。寧ろ身に寸鐵を帯びずして裸々敵中に入つて奮闘するといつても其方が効績がある。抑もこれが皆凡夫即ち世界の客奴となつて居るから道具にまで追ひ使はれる。一朝豁然として其主公の座に即かば鈍刀轉じて亦利刀となるのである。曾てある雜誌に於て東坡の詩を頌したことがありました。左に掲ぐ。

人皆生子欲ニ聰明一
吾爲ニ聰明一誤ニ一生一
唯願孩兒愚且魯
無災無難至公卿一

(上略)そもく人間の失過は聰明といふが大因で。人の大患は我身の有ることゝ老子がいふたは實際のことである。生兵法は大疵のもとで寧ろ矢鱈無轍法の方がよろしい。物の道理が少し分るとその間に禍過湧然として發生する。智とか才とかいふがいつも苦勞の種まきをするのである。金あるときは金あるに苦しむ金無ければ亦無きに苦しむ。願くは我金といふことを失念したいと呂禁が愚痴をこぼした。尤ものことである。賢才とか智者だとかいふことを一切失念したがよい。この失念の當躰に而も賢才智術自ら適ふのである。別に野心に煩つたことも無いが。妙である。こんな幸福に成りすました。人間はすべて運でしやう。などいふことは事實である。計策を悉くし秘策極めざるはなくして而も齟齬失

却するも事實である。人間萬事塞翁の馬といふも一應の道理である。才子才を恃んで身を破る。人間の智慧……實は高の知れたものである。いや智慧といふは人間としての能力の一種である。之が宇宙を支配する全力ではない。吾人が尊仰して任ずる程の價值のあるものではない。目さきの事物に對してこそ智慧なれ。天地の眞際はこの智術を以て悉くすべきではない。僅かの經驗やなまじひの考察などに任かさうとすると大失策をすることじや。如々として愚魯の方か實は賢中の大賢である。さ、箇様に謂ふを聞かば或る人は膽を潰して呆れて仕舞ふであらう。森羅萬象宇宙一切の事物全く道理の内に網羅統括せられざるはなし。然るに道理を疎外にするは亂暴の極じやど。なるほど道理は一切を統括包容す

る。元來存在といふことが道理の當然の姿であるから。苟くも存在する事物は悉くこれ道理の影音である。この世に道理より外には毫末の眞として求むべきはない。がさて其道理と一口にいふその道理とは奈何なるもの乎が六ヶしい。自分勝手に自分の眼だけの道理では天地實際の道理とは言へぬ。物の道理は元來心の差別であるこの智といふもの、影法師で道理その物に道理を備へて居るのではない。言を換へて曰は、道理に元來自性がない。見るものが其道理とし其性質とする。であるから天保の時代には天保の道理が相應して現成せられて居る。明治の時代には明治の道理が相應して現成せられて。前後相照比すれば眞の道理と見へしも今は虚妄の道理となり。この上に尙如何なる道理のあらはれて如何

なる道理が眞となるや將た妄となるやも分らぬことである。畢竟見る者を離れては道理自體の存在は無い。其人は其人だけの道理を有して居るまである。果して然らば其道理の道理とすべきは何であるか至極六ヶしいことである。して見れば智者だとか才子だとかいふて少しばかり目前の理屈をいふて見た所が。廣大無限の天地世界に向つてどれ程の見透しがあるか高のしれたことである。それをば待みに思ふて彼此れ思ふ存分を遂げ様とする。そこで大失策大過語が湧き出す。至極尤もの譯である。蘇東坡が我れ聰明のために一生を誤つたといふたが本當じや。むしろ愚の方が優つて居る。マア歴史に證した所でもよく分る。大事大業の成効者——英雄偉人衆多の棟梁たる人々は。まづ鈍である。細かい智

惠は全く不得手の方である。沛公が我れと吾が身の陳平張良韓
 信などが智者才子の君となつてあるに不審だといふたも面白い。
 韓信が君はこれ天授であるといふたも面白い。マア兎まれ角まれ
 五尺の蛆虫が小才覺は天地の廣大を悉すことは出来ぬと諦めたが
 よい。智慧などを持みとするよりは寧ろ一氣を震立して剛情で仕
 てのけ様とした方が男らしい。大才子だとか大物知りだとかいふ、
 そんな者に大事大業を成効したためしが無い。めつたに物知り學
 者などになつて人の重寶になるまいものぞ。知ること多くして煩
 ひを殖すといふ厄介を見ない様にすべきじや。
 かくの如く曰はれ。丸で何も知らぬ大愚者となれといふ様に聞へて
 甚穩當でない。然しながら南の方にゆがみ過て居る枝を眞直に矯め

んどならば。とりあへず其の枝を北に枉げることである。人を見
 てこの人は是れ此の枝を北方に曲がらしめんとする人なりと思ふた
 ら誤りだ。北に枉げるは實に是をして眞直ならしめんが爲めである。
 今掲げたるもの今この章に説く所。之を要するに智才も亦人の道具
 (能力)に過ぎざれば。之を持みとせずして別にまづ其道具を使用す
 る底のものを原ねよといふにある。

心鏡 (續後拾遺)

御嵯峨天皇御製

みな人の心もみかけらばやふる

神の鏡のくもる時なし

第五 臨機應變活殺自在の働きの事

○不動智の事

○無念無心の大自在

○機會の發見

○劍道の秘事

無念無心なるが故に大自在臨機應變活殺與奪當意即妙の働があらはるゝといふとは。實にこれ至極の妙術であるが。解し難く亦甚だ相應し難い。はじめて之を聞いた人は直に阿然冷笑して。無念無心が何として物の用に立つことぞ。草木土砂悉く無念無心なり。彼れ實に碍々として用働あることなし。無念無心果して靈妙の働きありとならばそのもの何ぞ其の働きを現さるや。などゝ眞面目になつて横鎗を入れる。之は無念無心を聞き損ねて居るからの間違ひであ

る。無念無心とは念心心身の絶無なるをいふのではない。心身の未だ現象とならぬ様をいふ。たとへば歩まずといふて足のないのをいふのでない。足があつても其足の働きたさぬ様をいふのと同じ趣である。無念無心は心の絶無をいふのではない。心にいろゝの思想が現はれぬ所をいふのである。さてこの思想意思が現はれぬは眞に現はるべからざるのではなく。いつ何時でも自在に現はれ働くべき心が現れずして静まつてあるを謂ふのである。故に無念無心が直ぐといろゝの妙用を現すにはあらずして。無念無心なるが故にいろゝの妙用を現すに差し間がないのである。たとへば礪ぎ磨きたる鏡の上には常に毎に無影無象である。無影無象であるからして何時にても影を映し象を現はす。影を映し象を現はすも亦來るに應じ去

るに任せて拒むといふことなく容れずといふことなし。今もしこの鏡に影の着するものあり象の止りて離れざるものあらんか。其他の象影すべて映ずること能はず。人の心も亦是の如くである。金剛般若經に應無所住而生其心といふことが説いてある。是は是の心は如何に住すべきや……心の置き所はどこであるかといふ問に就て世尊の示説せられたる要訣である。應さに住する所なくして其心を生ずべし。住即ち置き所があつてはならぬ、どこへもこの心を置かずに機に應じて其心を生ぜよといふ意である。今の鏡と同じく何れの象影も止めずして向ふ所に應じて其影を映す趣がこの示説の意である。

然るに通途凡夫の心はなかく鏡の様に無塵無垢のことは一生涯一秒時も無い。石腦油をふり撒た水面の様だ。自然とさまざまの紋模様を書き出して風のまに／＼種々雑多とりどめの無い象影を浮めて居る。であるから上から何ものを寫しても映らぬ。朝、目が醒めると直ぐどこの石油の紋彩といふ工合に煩悩が坐をしめて獨り相撲を取つて居る。故に目の前に下つて居る好機會も分らない。明案工風も心に浮ばぬ。當然の道理が氣が付かぬ。自己が勝手に心念上に畫きたる妄想を眞の象影と思ふて大失策をする。まづ是が通途凡夫の有様である。又それが常の僻となつて居るから別にあやしみもせぬ。人間は誰にても目さへ醒めて居らば何かしら考へて居るものと思ふて居る。甚しきは心に考へて居ること、手足に爲して居ること、常に違つて居る。飯を噛みながら雪隠のことを考へたり。路を歩みな

から碁を打つたことなどを考へる。敢て考へるといふにはあらぬ
 も自ら其念想がとりとめなく湧いて出る。であるから持つて居る茶
 碗を落したり往來の人に衝き當つたりするのである。珠光といへる
 禪師が専ら茶の湯を勧誘せられたのも畢竟禪學のためである。其心
 を常に其爲すことに取りつけて他に亂さず。事の去るに従つて其念
 想を去つて少しも止めない。心行相應して來るを拒まず去るを追は
 ざること鏡の如からしめんとしたるがこの茶の湯法である。然るに
 分らぬと云ふ者にはトンと仕方のないもので。またこの茶の湯に凝
 り固まつて茶の吟味器具の好みなどで一層面倒な煩腦を引いたして
 折角の眞旨も仇となる様になつてしまふた。
 世に頗る談話に巧みなる人がある。滔々數千言流るゝ如くに出で、



昔し百丈和尚談法のとき、一人の老人ありて、毎に衆に隨て法を聽く、大衆の歸るとき老人も亦歸る、ある日此老人一人歸らず、師之に問ふ、面前に立つものは誰ぞや、老人曰く、某、過去にこの山に住し、學人が問ふに、大修行底の人は因果に落るや否と、之に答へて因果に落すと曰ひき、其見解によつて五百生の間野狐身を受く、希くは和尚の一転語によつて、この野狐身を脱せんことを、乃ち老人あらため問ふ、曰く、大修行底の人還て因果に落るや否、師曰く、不昧因果と、老人言下に大悟して野狐の身を脱し得たり。

少しの滯とどまもない。この人は果して何とした心地しんちもて談話さんわしてをるかといふに。其心は洞然どうぜんとして一物も止めぬ。もし一物なりとも其心中わたくしに蟠わだかまり居つたならばこの語が是の如くサラ／＼と出づることはならぬ。世に頗る頓智とんちの好い人がある。この人は遂に其心に着ちやくすることなく虚々靈々きょくけいれいけいとして機はりに應おこじて自ら出づることである。頓智とんちの貯蓄ちよちやくをして置いて必要ひつようを待ち伏ふせするといふ様なことでは一向いっとうに頓智とんちとはならぬ。人と論議ろんぎし乃至事に當つて處分しよぶんするも亦復また當意とうい即妙そくめうでなくては必勝ひつしょうはならぬことである。此當意とうい即妙そくめうは何より出るかといふに無念無心より出るのである。心中いってん一點いってんの碍がい壅おんなく朗然らうぜんとして透とほるが如き境界くわいがいに至れば。一言一句も奇想ききやう巧妙きやうめうならざるはなく。機はりに乗じて活殺くつそつ與奪よとく自在じざいの働はたらきをなし

て。右より来るものは右に應じ左よりは左に前よりは前に後よりは後に相應じて大自在の處理を爲す。

英人スチュワート、カムベルランドといふ人。他人が胸中の意思を探て自在に之を読み當つる奇術に達し。現に各國の帝王宰相公卿と會合交際して悉く其の胸中の秘密を讀破して大に喫驚錯愕せしめたることは一千八百九十年の頃で。獨のヒスマーク公も其讀心せられたる一人である。古へ印度にも他心通といふことがあつて自在に人の思念を觀破したそうじや。今日の文明人はなかくに這の種のことばは一笑に附して小説的の妄談として仕舞ふ。いよく實際目前に現れてからハテ箇様の道理もあるものかなと膽を潰すことである。英人カムベルランド氏の實驗談は齋藤小二郎といへる人の譯述した

七七

ものがあるから就て見るべし。其に對して《今夫れ他人ノ思想を讀破するが如きは事太だ怪奇不可思議に屬すと雖も。現に英人スチュワート、カムベルランド氏の之を善くするあり。列國の帝王宰相名人賢士皆な氏が爲めに胸中の秘想を讀破せられて茫然自失したり云々……尾崎學堂》《上畧……特り憾む心理の學科未だ其極に達せず。蓋し心理の學科たる之を仰げば愈高く之を切れば愈堅く玄明深遠の局。往々世の學生をして囊中探つて物なきの憾あらしむ。余も亦此憾を吞む茲に年あり。東西の書を閱する蓋し又一にして足らざるなり。(中畧)今齋藤氏譯述の讀心術を讀みて始めて心理の活劇を見て報愧交も至る。其の新其の奇實にカムベルランド氏に謝せざる可からず云々犬養木堂》の語があつた。是の如きことは古く印度に於て

盛んに傳へられたことで、經傳の上に確と證せらるゝとであるが例の古の妄譚といふ言葉の上に抹殺せられて、今英人が現にやつて見せるといふことに成つてはじめて本當に相違ないと信じて。さて心の上の沙汰であるから心理學でも調べて見たら其道理の分明になることであるかなどといふことである。萬物皆異象同根であるとは佛の常談である。同根なるが故に事物相通じ相感せぬものはない。只心と心とのみならず物と物とのみならず心と物とも亦相通じ相映するのである。であるからこの心に聖碍なくして鏡の如きときは人の心念の感知すべきに止らず遠く千百里の事物の變化も亦感知すべしとある。カムベルラント氏が人の心念を讀まんとするとき己れの心念を虚靈となす。而して人の思力は強きに比例して明瞭であると言

ひしはさもあるべきことである。これも亦無念無心の作能の一つであるといふ例のためにこゝに引き合ひにだしたが。禪學は讀心術の方法であると思はれては困る。

又擊劒家は其秘旨無念無想にありと説く。澤庵禪師が柳生但馬守へ不動智の禪機を示して無心の大自在を傳へたる如きは有名の談柄である。斯通の達人一刀齋は禪門に歸入し。宮本武藏も亦禪を學んで五輪の書を著作して其奥旨を説き。近くは山岡鐵舟居士禪によつて其神髓を得たりといふ。しかるに其得たりと爲す所は皆實に無所得の得にして所謂無念無心の機用であるといへり。これに就て榊原鍵吉氏に面白い話がある。曾て 天皇陛下北白川の宮能久親王殿下の邸へ行幸あらせられたるとき。宮は榊原鍵吉を召し出して明

珍ちんの造りし兜かぶとを研きらしめて之を天てん覽らんに供きやうすべく思おも召めされて。其越こ鍵かぎ吉きちへ申し下くだされた。すると神原かみはらは固こ辭じして嘗かたて兜かぶとを試こみしこと三回にまで及およべども一度も能よく研きり得えたること無し。御命ごめい旨しは身みにあま
 る冥めい加かには存ぞんずれども此この儀ぎ鍵かぎ吉きちの力ちからに及およびがたしと申し上げた。
 が宮みやは御承知ごしやうちなくして研きれずとならば堅かたき物ものを研きる式しきなりと致いたすべ
 しとのことであつた。よつて鍵吉かぎきち御受ごうけを爲なして其そのの當日あつじ麻あ上下じやうげを
 着きし上田美忠かみだみち、逸見宗助おとみむねすけと外ほかに山田某やまだたつたとを伴ともひて堅物けんぶつ試截しせつの場ばに出
 で。法はふの如ごとく装さう置ちしてさて之を研きることであるが固こより研きり得えべか
 らざることば再三試しみて知る所ところなれば。今は只直ただ眞ま影かげ流りゆうの刀法とうぽう方丈ぼうじやう
 の形かたといふを行なふて止とまんと心に定さだめて。其形かたの如ごとく精せいを凝こらし氣き
 を鎮しづめて式しきによつて大喝たいかつ一聲いつせい兜かぶと上うへを打撃たげせるに。豈いか圖たらんや刀深とうふかく

入いつて兜かぶとを截きつた。よつて更に宮みやは上田逸見かみだみちの兩人ふたりに命めいじて式しきの如
 くして之を試こましめられたが二人ふたりとも兜かぶとに少しも傷やむること能よはず
 して止とむ。其後そのち鍵吉かぎきち氏は松平如水まつだいらみづといへる人に問とふて。天覽てんらんの場ばに
 於おて兜かぶとを研きり得えたることは我われながら知らずといひしに。如水みづは其時そのとき
 全ぜんく之を研きるべき邪心じゃしんなく純じゆん一無想いちむしやうの氣合きあひを得えたからであるといふ
 たとある。

さて、無念無心の却かへて大自在だいじざいの働はたらきを現あらわし得えべきものなることは大
 方は分わることである。また無念無心むねんむしんは心の絶無けつむといふのでないこと
 が分わる。そこで今いまはこの無念無心むねんむしんとは如何いかなる心地こころぢであるかを少し
 く述のべやう。

既に述べたる如ごとく無念無心むねんむしんとは木石土砂ぼくせきつしやの如ごときといふのではなく。

この心は嚴然として而も一物にも奪はれぬ姿である。たとへば鏡體嚴然として一切の影相を寫して而も一物にも汚されぬと同じくである。この心も一切森羅萬象と交渉して而も一塵も其れに執着せざる。こと亦鏡の如きを名けて無念無心といふのである。されば無念無心といふも心靜寂に歸して耳に音を聞かず舌五味を感ぜず目に諸色を見ずといふのではない。かくの如きはたとへば寫るべき鏡を曇らして物像を遮りたるが如くじや。又は睡眠して一切の知覺を藏めたるが如くじや。千狀萬種の物像を寫して而もこの鏡は常に毎に無像である。鏡無像なるが故に千狀萬種の像來つて之に映ず。この心も千狀萬種の境遇に交渉して而も常に毎に無念である。無念なるが故に千狀萬種の働きに應じ得らるゝのである。是の如き無念無心が禪

の境界である。この境にあらざれば禪によつて自性を徹見して立地に佛を證するといふことは六ヶしい。最初の章に於て自性清淨三昧のことをいふたが。この無念無心の三昧を自性清淨三昧といふのである。三昧とは心一境なりといふじや。心一境に純ら住まり他に散亂せられぬことをいふ。勝安芳海舟翁が曾て人に語つて曰く。おれは是迄ずいぶん外交の難局に當つたが。併し幸ひ一度も失敗はしなかつたよ。外交に就而は、一つの秘訣があるのだ。心は明鏡止水の如しといふことは。若い時に習つた劍術の極意だが。外交にもこの極意を應用して少しも誤らなかつた。かういふ風に應接して、かういふ風に切り抜けやうなど。豫め見込を立て、置く

のが世間の風だけれども。これが一番わるいのだ。おれなどは何にも考へたり目論見たりすることはせぬ。たゞ一切の思慮を捨てししまつて。妄想や邪念が靈智を曇らすことのない様にしておくばかりだ。即ち所謂明鏡止水のやうに心を磨き澄まして置くのだ。かうして置くと機に臨み變に應じて事に處する方策の浮び出ること。恰も影の形に隨ふが如く。響の聲に應ずるが如くなるものだ。それだから外交に臨んで。他人の意見を聞くなどは。たゞ迷ひの種になる許りだ。甲の人の説を聞くと。それが善い様に思はれ。また乙の人の説を聞くと。それも善い様に思はれ。かういふ風になつて。遂には自分の定見がなくなつてしまふ。畢竟自分の意見であればこそ。自分の腕に運用して力があるのだ。人の智恵で働かうとすれば。喰

ひ違ひの出来るのは當り前さ。云々。

この明鏡止水は禪語である。無念無心のありさまを明鏡の如く又止水の如しといふ。事として影ぜざるはなく而も來るも生にならず去るも滅にわらず。金剛經に應とに住する所無くして而も其心を生ずべしとある有様じや。海舟翁又曰く。おれは何時か中村敬宇にいふたことがあるよ。お前等を大切にするのは。失敬の喩だが。ちやうど金箔の附いた書物を大切にすると同じだ。塵を着けず下にも置かず。随分尊重はするけれども。さて實際の場合には。おれは決してお前等の教を受けやうとは思はない。憚りながら實務のことは。おれの見るところがあるから。必ずしも古人に法らず。必ずしも書籍に質さず。事に應じ變に處して。鞘開いて豆墜ち。水流れて渠成る的の

作用があるのだ。といつた事があつた。云々。
 笑開いて豆墜ち水流れて渠成る底の作用。これ即ち無心より流出
 する活達自在の機である。流石に禪學で鍛へた勝伯。おもしろい事
 をいふではないか。

落語家の圓朝がある人に語つた。曰く。私共若年の時分落語の稽古
 をいたすに。なか／＼骨を折りましたもので……。今の若い
 人達にはわからぬ程の苦心もあつたのです。何の道によらず。一道
 をあきらめると申すことは。一と通りの心得では駄目なので。四年
 や五年で。その奥に達する譯のものでは無いと思はれます。少くとも
 三十年の堪忍丹精がなくてはの事でございませう。實を申せば。一生涯
 修業すべきものでござりませう。私は二十歳の頃から眞打ちにな

りまして。師匠は大概中入前に話を仕舞ひます。何時でも師匠が今
 夜は何を話すつもりだと問ひます。これ／＼の話をいたす考だと申
 しますと。何時もその話か左も無ければそれに似よつた話をば致し
 て仕舞ひますから。私は高座に上つて途方に暮れたことも度々ござ
 いました。餘りひどいでは有りませんかと申しますと。何が非道い。
 何でも自分で考へて。出鱈目にやれば善いではないかと云ふのです。
 これが爲めに私は自分で話を作る基を開きました。我れと我が心
 を練り思を構へて話の筋が立つやうになつたのは。全く此の時の師
 匠の教訓でございました云々。なにも考なくして高座に升りさてべ
 ラ／＼と饒舌りつゞけて話に筋が立つて面白く聞ゆることはつまり
 出鱈目に相違ない。之が實は出鱈目なればこそさふゆくののである。

風あり、幡を颯々、二僧對論す、一人云ふ、幡の
動くなりき、一人云ふ風動くなりき、六祖之を聞
て曰く、是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くに
あらず、仁者の心の動くなりき。



之も大に味のある断しである。

僧 (新撰古今)

佛國禪師

折りえても心ゆるすな山櫻

さそふあらしの在りもこそすれ

長夜夢 (雑談集)

無住上人

長き夜の睡りの中にまた睡り

夢の世になほ夢を見るかな

第六 大偉人の事

○自業自得

○凡夫を轉じて佛となす

〇佛即大偉人
〇禪學の修養

禪學は頓機成佛の法門であるそうであるが元來その成佛といふことは如何なることであるか。佛に成れば至極の幸福のことにてもあるか。我々は佛などにはなりたく無いが。その禪學といふものに寄つて膽力を練つたり言説機辨の助としたり仕たいのである云々。個様に申し込む者がある。中には人間として悟を開かなくてはならぬ義務があるか。など、寐言をいふものがある。僕は悟を開かなくつても満足が出来るソンの餘計なことは仕たくない。といふ者もある。まるで禪學といふ品物を賣り拂ひにでもするとき買ひ手がいろ／＼の文句をいふと同じくじや。しかも夫等が輩に各卑賤の野心を

備へて手輕な都合の好い利益があつたら試みたいといふ根性はたしかにあるのだ。ソソな者には近づいて貰ひたくない。そが輩は禪の根機でない強いてその器にあらざるに之に説くは説くものゝ非である。佛教といふ法網には夫輩に相應の法門も澤山あつて一切衆生攝取不捨であるが。禪門の方では決して取り合はぬことじや。

しかしながら世の末となつて佛といふことが分らなくなつて、或は一種の變人である様に思はるもあり。之に對して勝手な觀念を懷いて居るは大なる誤過に陥る因であるから。佛とは何物といふことを聊か辨ずることゝしやう。

昔の道士が如何かこれ佛と問ひて大事を決了したことが語録などに澤山あるが。今はそれとは大違ひで形相上の佛を説くのである。昔

し僧ありて雲門和尚に問ふ。如何なるか是れ佛。雲門曰く。乾屎橛
 なり。又僧あり洞山和尚に問ふ。如何なるか是れ佛。洞山曰く。麻
 三斤。これ等は問ふものに當機しての答であるから端的の眞實裏に
 答へてある。今は佛とは宗教家の親玉のことか。もしも延喜の悪くな
 い立派な者であつたなら聞て見ましやう。などいふお客様に答
 へる格であるから麻三斤だの乾屎橛だのといふ六ヶしい事をいはず
 に誰にも分る様にいひます。が其かわり之を聞いて下手にまごつく
 と更に一層の迷惑の念入り凡夫となるかも知れぬ。
 如何か是れ佛といはば曰く大偉人。佛とは別に變人でも仙人でも何
 でもない至極の大偉人である。三十二相具足三徳圓滿の大々偉人で
 ある。禪門は劣等凡夫地を頓齊に飛躍してこの大々偉人と成る法門

である。然らばその大偉人とは果して如何いふ工合の者であるか。
 サアこの大偉人の定義は六ヶしい。これから先をいふと麻三斤にな
 る。よつてまづ大偉人即ちエライ人になることゝ信じたがよい。
 三十二相八十種好等を以て佛を見ることは禪門の大禁物であるが。
 果して佛は三十二相八十種好の滿徳體で無いからいふのではない。
 正しく三十二相八十種好の滿徳體には相違ないが。凡夫はその形骸
 に迷ふて益々佛に遠ざかるか故に之を制したのである。禪は無所得
 の法門であるを佛を認めて作佛を圖るは元來是れ禪門の修行でな
 い。世界と我と衆生も佛も善惡是非悉く一齊に俱沒俱殺して百尺竿
 頭に尙ほ一步を進まねばならぬ。果してよく是の如くならば近く我
 身に其佛を證することである。ではあるが斯くいふては一向に分ら

ぬことゝなつて惡斷見に陥り易い。之を要するに三十二相形骸上の佛もあり、娥媿畜生等の衆生もあるが。この差別は畢竟してものの心に歸して佛にも衆生にも其本來の自性はない。心も佛も衆生も元來平等一如である。悟らざるものこの差別に迷ふ。悟り來ればこの一如を證見する。未悟に於てこの差別は眞實なり。眞實なりといへども悟るものはこの差別を没す。千百劫の長時間を費して難行苦行して成佛を遂げ。三十二相八十種好萬德圓滿の金剛身をこの人身の上に證し得ることは眞實である。禪の力によつて身相を轉ぜずして立地に佛心を證し得たるも眞實である。山川草木一切衆生本來成佛も眞實である。茲は少しく分らない。姑く疑問として師によつて參じて見たがよい。

それまでに先づ凡夫地からして佛を見受けたる有様をいふべし。さきに大偉人の定義は甚だ六ヶしいといふたが。之を述ぶることが六ヶしいのではない。禪學に入らんとする人に聞かして誤らしめぬ様にすることが六ヶしい。されども一向に言はねば亦全く暗中の燈を亡するが如くである。こゝは實に止を得ざるの一章である。我には生老病死の四苦がある。佛にはこの事なし。お互ひにこの世に在るからにはまづ活て居ることが第一じや。活きて居るに就ては日に三度の食物である。寒暑の衣服乃至住居が須要である。この須要物は只では湧いて出ぬことゝて夫れ相應の骨折りをして之を求むる才覺をせねばならぬ。自分が出来ることをしてやつて人に足れぬ所を補ふて貰ふ。人と人と相交るよりお互ひに相親むと相疎むといふ

ことも出来て来る。権利が起つたり義務が生じたり。喜んだり怒つたり。相扶けたり相害したり。種々累蔓して百萬の利面百萬の害障を伴ひ。錯錯萬緒をなして一日片時も安穩ならず。或は病み苦みて呻吟の廢人となり。或は老朽して死を待つの外なき哀れの身となり。或は五年十年の短日月を一期として皚々たる芙蓉の峯洋々たる琵琶の湖と分れ。父母にも兄弟にも夫妻にも子孫にも斷腸の別れを以て死し去る。死し去つて又業のために展轉して千狀萬種の苦界に唵喞し。唵喞する所次第に生を引て展轉止むときなし。佛は即ち然らず。千百萬歳を経て身朽することなく。火も之を焼くべからず。水も之を浸すべからず。毒も之を害すべからず。富貴も之を蕩する能はず。病疾も之に入る能はず。森羅萬象一切に聊かも侵害せらるることな

く。六道に出没して遊戯自在なり。朝に天空に飛遊して日月を弄し。夕に乾坤を吞服して大虚空に眠る。かくの如くであるが之を人生目現の上に約すれば。肉體健全にして病あるを知らず。喜怒哀樂の情に於てよく自在を得て他の刺戟あるも其情を動かさず。常に虚心平氣にして寸毫の煩念惑迷なく。事を決し物を處すること流れに従ふが如く。威徳具りて説かざるに人之に感じ怒らざるに人之に服し。世界一切の事故に對して毫末も怖畏する所なく。事に接して事に溺れず。名聲四海に轟き財福圓滿す。よく天下の大事に當り大効を擧大業を成じて一舉手一投足悉く公衆の利福を因す。是の如きは此人中の佛所謂至極の大偉人なり。

この大偉人と成る方策は如何。なんの雜作もない禪によつて單刀直

入して一跳到入足するのさ。どうして又禪はかやうな功德がある。されば、人間といふものが一つの成績物である。過去に種々の原因があつて現在かくの如くなり行くべき一躰を得たのである。故に今この一躰を打破碎塵して更に本來の眞佛に歸るのである。本來我々一切の衆生皆これ金剛不壞の本佛であつたものを。いつか戸惑ひをしていろくの原因を造つてこんな結果をしでかした。すでにこの身がある原因の成績物だから大方の定りがあつて我が身が自由にならぬ。佛にならふと思つても容易には成れぬ。幸福を得たいと思ふても夫もならぬ。死にたいと思ふても夫もならぬ。活きたいと思ふても夫もならぬ。茲に一番の大奮起をなしてこの成績を滅茶々に打ち破つて仕舞ふ。全く打ち破り了れば即ち本來の天真佛。積年の疾

八九
が癒つて山の如き借金を返して仕舞つた様な心地よいこととなる。その打破歸元の法方が禪學じゃ。打破歸元の有様が見性成佛じゃ。是の如く一人成佛すると。之を圍繞する所の天地も人衆も亦その成佛の恩光に浴して一成一切成となる。たとへば一人大業を起して大利益を興すときは。之に接する爲めに亦利を得るもの多きが如くじゃ。又一人盛んなれば其一族悉く盛にして其所有の山林田畑までが盛んになると同じくじゃ。之を一舉手一投足悉く公衆の利福を因すといふのである。ア、夫れかくの如き至高至尊の佛大偉人誰れか之を敬慕せざらん。况んや凡夫を轉じて其佛偉人たらしむる所の單刀直入の法門をや。

繩ならぬ思ひに身をば縛られて心の外に解くものぞなき

第七 坐禪の事

- 坐禪に動靜の二行あり
- 日々世事務の處これ坐禪の好道場なり
- 山間靜處に禪を修するは活禪にあらず
- 坐禪の衛生の事
- 禪觀方便の事

華嚴經に曰く。奇なるかな一切衆生具さに如來の智惠徳相ありタレ
 妄想の執着あるが故に證することを得ず云々。されば赤の凡夫にも
 佛大偉人の徳相があるのだが只妄想のために遮られて赤凡夫となり
 居た。よつて今この妄想の執着を碎き滅して仕まへば即時に如來即、

昔し、婆子あり、
 一庵主を供養して
 二十年に至る、常
 に二八の女子に給
 仕せしむ、一日女
 子をして、庵主を
 抱て言はしむ、正
 徳慶の時いかん
 と、庵主答て曰く、
 枯木寒巖によつて
 三冬暖氣なし、婆
 子之を問て曰く、
 二十年この俗僧を
 養ひ來れりき、即
 ち庵を焼て去る。



佛となる譯じや。サアこの妄想はいかにしたらば碎き潰して之を亡滅せしむることが出来るであらう。達磨大師曰く。外に諸縁を逐はず内心喘ぐことなくして心 牆壁 の如くならば道に入るべし。この道に入るとは佛々の境界 に入ることじや。外に諸縁を逐はずであら佛とは何ぞ妄想とは何ぞといふ様な兎角の詮索はすべて棄却して聊も疑慮案配に涉つてはならぬ。内心喘ぐことなくして心 牆壁 の如し。道元禪師が只管打座して作佛を圖ること勿れといふもこじや。どうしたら悟れるであらう早く悟つて見たいと馬子々々してはならぬ。至猛烈に心を撮めて牆壁の如く動かず其まゝに千百萬歳を辛捧して見たがよい。普勸座禪儀に曰く。謂る結跏趺座は。先づ右の足を以て左の脛の上に安んじ。左の足を以て右の脛の上に安ん

ず。半跏趺坐は但だ。左足を以て右の脛を壓すなり。寛く衣帶を繫けて齊整ならしめ。次に右の手を左の足の上に安んじ。左の 掌 を右の掌の上に安んず。兩大拇指を面へて相柱つ。乃ち正身端座なり。左に側り右に傾き前に躬り後に仰ぐことを得ざれ。耳と肩と對し。鼻と臍と對せしめんことを要す。舌は上腭にかけて唇齒相ひ着け。目は 須く開くべし云々。座禪用心記に曰く。垢衣と舊衣とは浣洗 補治して垢膩を去り。淨潔ならしめて着用すべし。垢膩を去らざれば身冷て病を發す。又障道の因縁たればなり。身命を管せずと雖も。衣の不足、食の不足、眠の不足、是を三不足と名けて皆退墮の因縁 なり。一切の生物、堅物、乃至損物、不淨の食皆食ふべからず。腹中鳴動し身心熱惱して打座に害あり。一切の美食耽着すべからず。

但だ身心カフシロ煩ワザルあるのみにあらず。食念シキケン未だ免れざる所なり。食はた
 い氣を支ヨクるに取トルて味を嗜タシむべからず。或は飽食ホウシキして打座ナダゼすれば發病
 の因縁インエンなり。大小の食後シキゴ輒タダすく座することを得トクざれ。暫く少時シウジを經
 て乃ち座すべきに堪へたり云々。かくの如き作法によつて座を定め
 て打座す。このときいろ／＼の妄想が平生よりも一際イツサイさかんに起り
 來ることである。座禪論に曰く。煩腦ワズナウを厭いとはず只だ心を淨キヨむべし云
 々。ソレ煩腦が出たコレは困こまつたイヤこの困つたと愚痴ぐちをいふのも
 煩腦ワズナウだイヤ是も亦煩腦だと常に煩腦ワズナウ同士の喧嘩けんかをするやうではなら
 ぬ。煩腦ワズナウなどが出やうが出まいがソレは煩腦の御勝手おんかたて次第しだい我は只こ
 の不動ふどうを守るといふ工合に煩腦を相手あいてにせぬと煩腦の方が抜けて自
 然ぜんと消きえてしまふ。故に座禪論に曰く。一念不生は念を止むるに非ず。

念を止めざるに非ず。但だこれ一念不生なり云々。夢窓國師曰く。
 勤つとむれば則ち二乘にじやう外道の道に入り。怠おろそれば則ち凡夫の境きやうに墮おす。サア
 どうしたら宜いのであらう。無行經に曰く。若し人菩提ぼだいを求むれば則
 ち是の人には菩提なし。もし菩提の相を見れば是れ則ち菩提ぼだいに遠とほざか
 るなり云々。いづくまでも但だこれ一念不生にして墻壁しやうへきの如くでな
 くてはならぬ。六祖檀經に曰く。外の一切善惡の境に於て心念起ら
 ざるを名けて座と爲し内自性ないじやうを見て動うごぜざるを禪となす云々。この
 事純熟じゆんじやくして則ち豁然くわつぜんとして破壊はえを極きまむるとき。身を三千大千世
 界さいがいに踰こらして三世一切の諸佛の仲間なま入りをなすこととじゃ。古人曰く。
 一丈を説得せつとくせんよりは一尺を行取ぎやうしゆせんには若かす云々。愚圖ぐず々々い
 はずにまづこの卒死の修行を試みて而して後にいへ。

さて座禪に動靜の二途がある。元來座禪の本義は只一、一心不動なるにありて座して法界定印(結跏趺座)を結ぶに限つたことではない。只凡夫身靜ならざれば心も亦靜を得ざるがために。姑く方便して身心を規して其靜寂を得せしめ易くしたのである。されば本來は行住座臥喫飯放尿作務談話の間に於て是の如く一念不生を勤めねばならぬ。之を動中の座禪といふ。實際水に入つて溺れぬ稽古をするにはその水を泳ぐ能はざる始めよりヤハリ水に入つて替古をすることじや。故にいつなんどき水に入つても實際によく游泳して自在である。森羅萬相の塵勞を認めて居る人間がこの森羅萬相の塵勞を打滅して仕舞ふといふに。その塵勞刺戟を厭ふて山間靜淋あるは暗室などに入りて座禪をしたとてなんの役にも立つものではない。水に遊ぶこ

とを習はんとして而も水に入るを怖れて疊の上で替古をしたことならば。何年立つても水を實際遊ぶことは覺束ない。故に禪學に入るものは須くこの動中の坐禪によつて練鍛すべきじや。潯山祐禪師が曰く。行脚の高士は。直に須く聲色の裏に向つて睡眠し。聲色の裏に坐臥して始めて得べし云々。又虛堂愚和尚は。君に勸む。處を得れば衣を披して坐せよ。松枝を折りて藓痕を拂ふこと莫れといふた。又卍庵老人は頗る親切に説いて曰く。正念工夫は動作中に最も修練すべし。必ずしも靜を求むべからず。往々靜なれば則ち修行事速かなるが如くに思ひ。動中は散亂する如く思へども。靜處の修練得力は動境に對する時に確實ならず。臆病懦弱の働きあるものなり。もし諸法に通達し萬事に自在なることを得んと欲せば。動中の工夫に

超へたるはなし。故に曰く。參玄辨道の衲子は聲色裏に向つて坐すべしと。又三祖大師の曰く。一乘に赴かんと欲せば六塵を惡む勿れど。これ六塵を喜び好めといふにはあらず。水鳥の水に入れども翎の濕はざるが如く。平生六塵の上に於て取らず捨てず。正念相續せよとの開示なり。もし六塵を嫌ひ避けなば。聲聞の根性に隨して永く佛道を成ぜじ。もし又明かに見性し去らば。六塵即禪定五欲即一乘にして諸法實相なり。動靜不二の大禪定に入りて身心共に脱落す。最初六塵五欲を嫌ふて修行する人は。假令心念空寂にして觀想明了なるも。靜を離れて動境に入るときは。恰も魚の水を失ひ猿の樹を離れたるが如し。もし能く欲塵の中に工夫し。竊直に進歩せば。鐵壁放開し須彌踏破する底の大歡喜を得て。塵中の主宰となるべし

云々。大燈國師の歌に「山居せば四條五條の橋の下往來の人を深山木にして」とあるも皆これ動中の修行の肝要なることを説いたのである。古昔の聖者が竹聲を聞て大悟し。あるひは蹉躑して當即に悟達し。あるひは師の喝下言下に大悟したるは。皆この動中長養の修行が熟して機を得て徹底したのである。左に論、經二三の金句を抄出して學者用心の資料とす。

○禪門の鐵鞭

楞伽經に曰く。心生ずれば即ち種々の法(法は現象の義)を生じ。心滅すれば即ち種々の法滅す。

維摩經に曰く。淨土を得んと欲せば其心を淨むべし。其心淨きに隨て即ち佛土淨し。

遺教經に曰く。但だ心を一處に制すれば事として辨ぜざるはし。

佛名經に曰く。罪は心より生じて還つて心より滅す。

禪門經に曰く。外相に於て求むれば。劫數を經と雖も終に成る能はず。内覺に於て觀ずれば。一念頂の如きも即菩提を證す。

又曰く。諸の聖智を求めんには即ち禪定を要す。若し禪定なくんば。念想喧動して其善根を壞す。

大日經疏に曰く。心みづから心を證し心みづから心を覺す。之を菩提を成ずと名く。他によりて證し他によりて覺するにあらず。

無行經に曰く。若し山林空閑の處に住して我は貴く人は賤しと思へる人は天上に生ずることだにありべからず。况んや成佛をや。

涅槃經に曰く。菩提心は生滅無常なり。常住不滅の佛性にあらざ。

無行經に曰く。若し人菩提を求むれば是の人には菩提なし。若し菩提の相を見れば是れ則ち菩提を遠ざかるなり。

大集經に曰く。夫れ菩提とは身を以ても得べからず心を以ても得べからず。身心は皆幻の如きが故に。

大日經に曰く。いかなるか菩提といふ。實の如く自心を知るなり。同經の疏に曰く。問ていふ。若し心すなはち菩提ならば。衆生な

にどかして佛にならざるや。答て曰く。實の如く知らざる故なり。もし實の如く(本心を)知らば初發心の時やがて正覺を成ずべし。

般若三昧經に曰く。心を以ても佛を得べからず。色を以ても佛を

得べからず。又曰く。身を以て得るもならず。智慧を以て得るも
あらず。(色は物質といふ如し)

首楞嚴經に曰く。妙性(本源本性)圓明にして諸の名相をはなれた
り。本より世界衆生あることなし。

大日經疏に曰く。一切衆生の色心は。實相にして(その見た通り
どの意)本より毘盧遮那の平等智身なり。(ヒルシヤナは本來清淨

絶對の當體)

法華經に曰く。如來の説法は一相一味なれども。衆生の性欲異なる
によりて解する所の法門各差別せり。

像法決疑經に曰く。如來は有にあらず。無にあらず。出にあらず。
没にあらず。色にあらず。非色にあらず。初成道より涅槃に至る

まで其中間に於て一句の法をも説くことなし。しかるに愚人は如
來出世して法を説きて人を度すと思へり。

楞伽經に曰く。始め鹿野苑より終り跋提河に至るまで未だ曾て一
字をも談ぜず。

華嚴經に曰く。眞淨界の中には佛もなく衆生もなし。

起世經に曰く。火神の水に入るときは水も火となり。水神の火に
入るときは。火も亦水となる。

法華經に曰く。治生産業も皆實相にそむかず。

圓覺經に曰く。修多羅(經のこと)の教は月を指す指の如し。

大日經疏に曰く。如來自證の境は(佛の悟りの境界)は觀者も見
ることなく説者も言なし。

楞嚴經に曰く。一人眞を發して源に歸すれば。(悟りをひらけば)
 十方の虚空一時に消殞す。
 又曰く。淨極りて光り通達す。(無念の極りなり)寂照にして虚
 空を含む。歸り來りて世間を觀れば。(禪定を出づるときは)猶ほ
 夢中の事の如し。

生死

白隱禪師

臍の底に心定めて能く見れば

死ぬも生るも大うその皮

非思量 (傘松道歌集)

承陽大師

守ることも思はずなから小山田の

いたづらならぬ僧都(紫山子)なりけり

瑞岩和尚は、毎日みづから主人公と
 喚んで復みづから應諾す、又慍々せ
 よと自ら固く告げ、復自ら諾す、又
 他時人の喙を受くること莫れと隣
 へ、復自ら諾す。



心猿

行誦上人

塵の世を梢となして木傳ふは

なにの心の山猿ぞこれ

意馬

同上人

荒れまゐる心の駒は幾度も

鞭うちてこそ進むとそまけ

第八 工夫修養の事

○参禪の規

○公案

○學人鍛冶の鐵槌

坐禪は無修の修。無行の行であつて習禪では無いといふが之は坐禪

をするものから觀たる言ひ分である。眼を轉じて其外より之を觀れば坐禪はやはり工夫修養によつて證得せらるゝのである。そこで禪學を爲さん人は必ず参禪して工夫修養を怠るまじきである。

禪門に公案に参ずるといふことがある。公案といふは猶利刀の如きものじや。参ずるは之を利刀を執つて業障を截斷すると同じ趣きである。我は元來業障の影である。業とは作業障は猶力といふが如し。迷ひの作業が一つの力となつて現身の結果を成じたのである。今この力を打破し去らば即ち真空清淨に歸入して迷悟もなく生佛もなき本源と冥合する本源と冥合したからといふて身も心もなくなつて絶對靈虛の空寂に歸するのではないぞ。其清淨本源の真空が即ちの身この心であることが了知せらるゝのである。却説その業障即ち

迷惑の根源を截断する利刀が公案で。參禪者はこの利刀を業障即ち當下の身心命根の上に加へて力を極めて截断するのである。果して截断し得たるとき即ち大悟大徹である。

しかるに今は參禪の者。この利刀を徒に懐にして己が身心命根上に加へず。或はたゞ利刀の形相を論じよい刀であるとかあしんどか誰が持へたのだ何者が賣つたのだといふ様に。つまりぬ詮議に日を消すこととなつて其本旨を失つた。元來截切が目的であるから。苟も公案を取らんには寸刻も放捨せずして其截断を圖らねばならぬことである。

むかし無門禪師堂に上り。趙州の狗子話を擧げ示して參禪の大衆に投附した。曰く昔し一僧あつて趙州和尚に問ふて云はく。狗子に還

つて佛性ありや也た無きや。州答て曰く。無し。無門禪師かくの如く示して後ち曰く。參禪は祖師のあたへられた關所を通りぬけることが肝要である。妙悟の要は種々の念想の往來するものが絶無となることである。祖師の關門も通れず心路も絶へぬとならば。これ依草附木の精靈じゃ。さてどんな所が祖師の關所であるか。名けて禪宗無門關といふ。もし之が通りぬけられたならば。親しく趙州和尚に見ゆることが出来るのみならず。歴代の祖師方と手を握りあつて。なにもかも祖師方と同じやうな境界になることじゃ。何んぞ愉快などこではないか。一つ通りぬけて見せやうといふものは無いか。之を通りぬけんとならば。なまやさしきことではゆかぬぞ。三百六十の骨節。八萬四千の毛竅。この身軀のすみくゝあまさを。通身に

大疑團を起してこの無の字に参じ來れ。夜も晝も行住坐臥念頭を
 放さず。有とか無とかいふ様な會得らしきことをしてはならぬぞ。
 といふて虚無の會得もならぬ。個の熱鐵丸を喉に打ち込めたるが如く。
 身命を忘れて之を噛んで見よ。いつもの様な智惠分別の沙汰をすて
 い。久々に純熟したならば。自然と内(心)外(身)を打成して一片
 となり去るである。その時ぞはじめてこの無の字に承當する。かく
 の如きときは啞子の夢を見たる如く只自知自了せよ。サアさうなつ
 た曉には。本來清淨の光が蕩然として打發し。天を驚かし地を
 動じ。關羽が手の中の太刀をも奪ひ取つて。佛に逢ては佛を殺し。
 祖に逢ては祖を殺すの大活機用が現るゝことだ。されば生死流浪
 もなんの心にかくるに足らぬつまらぬこととなつて。六道四生がそ

のままの遊歩の公園となるぞ。サアどう提撕してよ加ろうぞ。平生
 の氣力を盡してこの無の字と承當せよ。朝も夕も夜も晝も間斷なく
 參得すれば。法燭一點して便著を得ることじや云々。
 これを見たらば大方公案の提撕とはどんなものだと分るであろう。
 さてこの公案に向つて身を以ても爲さず心を以てもなさず。了不了
 解不解見不見皆悉く放棄して其外に於てこの公案を太刀となし身命
 を投擲して死し去るのである。

工夫と申すことは。唐土の世俗の言葉なり。日本に(いとま)とい
 へる語に同じ。(いとま)はいとまむま也(一切のしわざに通ぜり。
 耕作は農人の工夫なり。造作は番匠の工夫なり。かやうの俗語に
 寄せて。道人の佛法を行するを工夫と名けたり。本分の工夫をな

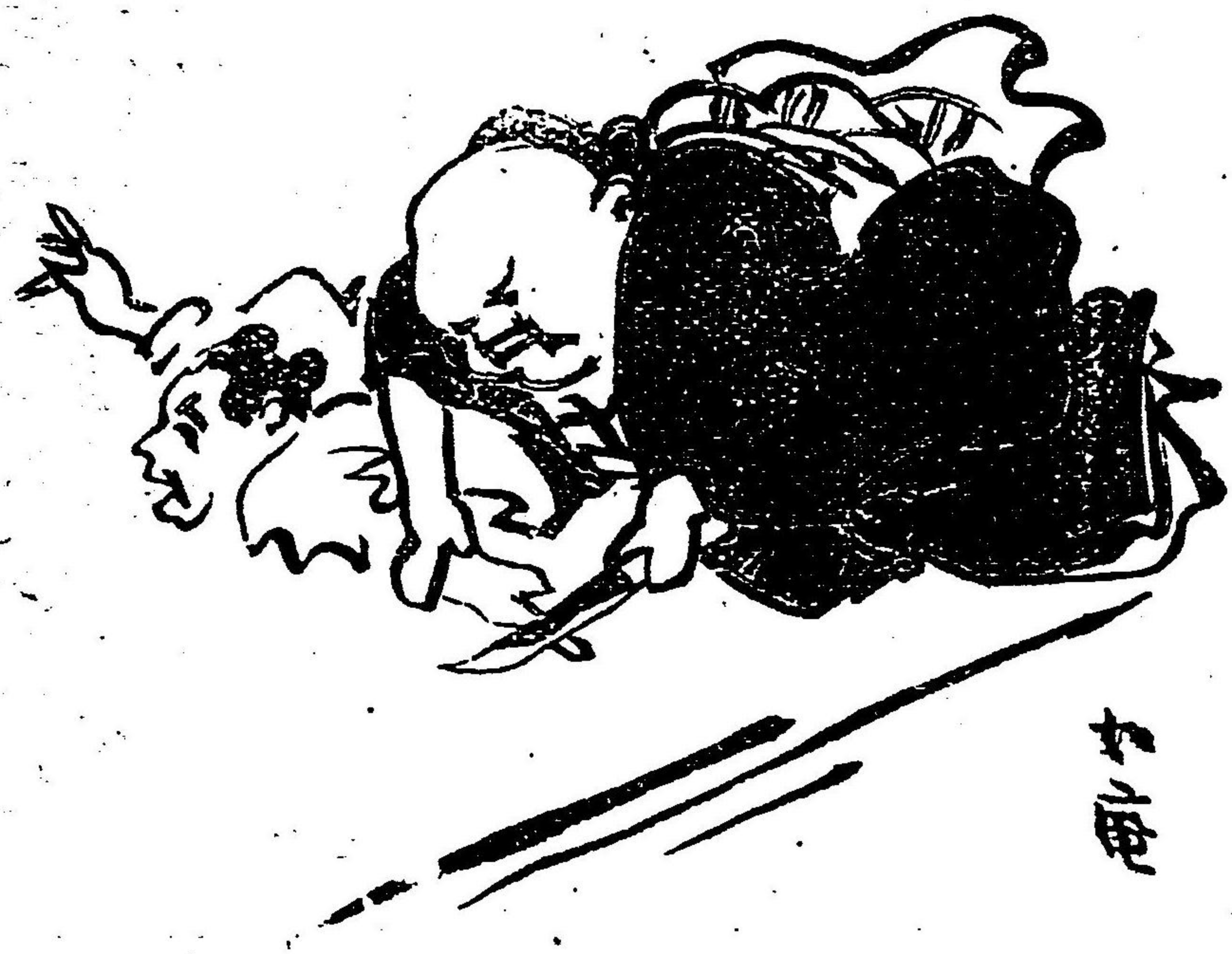
す人。萬事の中。工夫の中。とへだつべきことなく。然れども初心の學者について。しばらくかやうの義あり。向道の志の淺き人は。世間の萬事を正として其中に時を定めて坐禪するを日課とせり。今の叢林に（叢林は禪學専門の道場）四時の坐禪と申すも。二百年より以來この式を始めたり。上古は禪僧とて。或は樹下石上に居し。或は叢林に首をあつめし人。皆此の一大事のためなりき。故に寢食を忘れて二六時中工夫ならざる時節なし。末代にされる故に。一大事のためとは稱すれども。父母の命によりて心ならず僧形になれる人もあり。或は世間に走れば心苦しきことを通れんために。寺に入れるもあり。かやうの人どもは。まめやかなる道心もなき故に。飯を食し茶を飲むときは。食欲に障へられて

工夫を忘れ。經を讀み呪を誦するときには。事の行に心を奪はれて。本分に背きぬ。かやうの人の爲めに方便を設けて四時の坐禪とて。規式を定めたり。四時の外には工夫を停めよといふにはあらず。されば實に道心ある人は。今は坐禪の時ならずとて。徒に光陰をわたる事あるべからず。喫飯着衣一切の所作の處。衆に交り禮をなし人に對して物語りする時も。本分の工夫を忘れざる人あり。かやうなる人をば萬事の中に工夫を爲す人と申すべし。之は萬事を正として其中に時を定め。坐禪する人よりも勝れりといへども。いかにも萬事と工夫と差別せる故に。やゝもすれば萬事に奪はれて工夫を忘ることあるべし。是れ蓋し心外に萬法を見る故なり。古人の云山河大地森羅萬象、悉く是れ自己なりと。若し能く此の

旨を了すれば工夫の外に萬事なし。工夫の中に衣服を着し飯を食し。工夫の中に行住坐臥し。工夫の中に見聞覺知し。工夫の中に喜怒哀樂す。若し善く斯の如ければ。工夫の中に萬事を爲す人といふべし。是れ則ち無工夫の工夫無用心の用心なり。(夢想國師)

工夫を做すに最も緊要なるは。切の一字である。切の字太だ力あり。切ならざれば懈怠を生じ放逸となる。もし用心緊切ならば懈怠などの生ずる筈がない。切の一字は。たゞ懈怠なくして禍を離るゝばかりではない。この切の志の上に直に諸念妄想の動き亂るゝを制伏して。おのづから無念無心に入ることである。工夫を爲すには猫の鼠を求め得ざるが如く切でなくてはならぬ。眉髪の

俱融和尚凡そ所問あれば、必ず唯だ一指を擧示す、給侍の童子も亦擬僞して指頭を堅つ、融乃ち童子に問ふ、童子果して一指を擧す、融即ち刃を以て其指を断つ、童子痛に哭して去る、融復た之を召す、童子首を回らす、問ふ如何か是佛、童子例の如く指を堅つるに指無し。即ち豁然として領悟す。



火を救ふが如く切でなくてはならぬ。卵を懐いて雛を得るが如く油断があつてはならぬ。一人萬人と戦ふ如く須臾も念を放つてはならぬ。坐禪のとき無事安閑としてはならぬぞ。憤然としてこの鐵丸を噛み去る如く切にその心を持ねばならぬ。又工夫するに其公案を念じ去り念じ來ることはならぬぞ。いくら念じても千百萬年念じても何の効も無い。この公案に向つて大疑團を起して這の大事を了得せんとして。十方世界あるを知らず。行て行くを知らず。坐して坐することを知らず。我も我の外も通じて一團の疑團とせねばならぬぞ。(博山禪師)

達磨

群翁

壁と彌陀にらみ所は違へども

おまいは九年私しや十念

第九 學術技藝の奥妙はすべて禪なること

- 立身成業と禪
- 美術及文學と禪
- 政治と禪
- 詩歌俳句と禪
- 商事致富と禪
- 醫術と禪
- 工業及發明等と禪
- 音樂歌舞等と禪

禪は。よく物に主となつて常に心念明鏡の如く。而して臨機應變活殺自在の大機大用あるを其効果とすることは既にいふた通りであ

る。この事は萬作萬爲の奥妙に通じてある。何事の機用もこの妙旨を離れては妙もなく奇もなく秘もなく奥もなく。故に一切の秘奥は悉くこの禪機に包容せられてをる。

第一に立身の基礎成業の秘訣がこの禪である。どういふ學問を撰ばうともどういふ業跡を取らうとも。それは第二のことである。其の第一最要の件は其學問其業務を成爲する力である。この力が満足でなかつたら如何に好い學問でも如何に都合のよい業跡でも失敗に歸するは必然じや。同じ時と處で同じ資本で同じ仕事をして人間が異ると。一は甚だしき失敗に陥り一は頗る好結果となる類は事實である。さればその如何なる要件が謂ふ所の禪の機用であるかといふに。主客の占坐である。おのれが其學問業務に勞役せられてはならぬ。

ぬ。おのれよく之を弄する底でなければならぬ。曾て予は時勢は人を造るものにあらずして人が却つて時勢を造るのであるといふたことがある。それも人が時勢の主となるか客となるかの差別である。往々時勢を主と志て居るから人の眞偽で一生涯が忙しくて苦み通して而も時にも人にも秀づることは以て外の難事となる。時勢を客となす底の志を以て獨立獨行してよく其眞を得なば時勢は即ち之に従ふ。今その説文を参考のため左に掲ぐ。

時勢とは何ぞ！。吾人は常に口に時勢を謳ひて能く萬庶の談裏に應用して。未だ曾て難澁を感せざりしき。しかるに今や是に向つて明確なる定義を興へんとして。抑も吾人は時勢に運轉せられつゝあるか。將た時勢を運用しつゝあるか。時勢と吾人とは這の日

々時々の光陰を奈何なる關係を以て消しつゝあるかを講ぜんとするに當りては。其談裏應用の容易なりしに似ずして殆ど深確の觀念を把住すること能はざらんとす。

曰く。英雄の起るや是れ時勢なり。世態の機運興廢の成敗亦時勢の然らしむる所なりと。吾も人も平常談裏に於て得々として語り唯々として和することなるが。語るもの果して語り得て真切なるか。聞くものよく解し得て秋毫の不審なきやといふに。語り得る者必ずしも之を悉くして得々たるにあらず。和するもの必ずしも正しく會得して唯々たるにあらざるなり。何が故に英雄の起るは時勢なるか。何が故に世態の機運興廢の成敗は時勢の然らしむる所なるか。今や須く血鞭を加へて酷熱の腦裏を震打し。燎々とし

て之を悉さずんば止む可らず。

時勢は詳に謂はゞ時代的勢力なり。時代は世態の相像を謂ひて勢力は其移變の力を謂ふ。是の如きの想像と是の如きの移變とは。畢竟するに人の傾趣に歸着す。人の傾趣は其情の傾く所其念の趣く所にして需用に動きて智計を成し供給に集つて行爲となるものはなり。其動き集るの事態直ちに勢力となつて所謂時勢の相を成す。

是の如く人の動く所は力となり。力の及ぶ所は萬事となり。萬事と人どが時代の相を成し勢力の體と爲るとせば。人は時勢に先だつものにして時勢が人を造り萬事を産するにはあらず。抑も人が時勢を礎き萬事が時勢を構ふるものと謂はざるべからず。

偉人現れて天地一新し。英傑躍立して時勢變動し。覆載の事運勢
 力は擧げて悉く人力に歸因せざるもの無きを見ば。人は是れ世を
 造るものにして英雄は即ち萬物の主なるを知らん。誰れか敢てこ
 の尊貴の人をして時勢の浪濤に巻き去らしめんとする者ぞ。或は
 曰く。世の賢者は善く時勢に従ふと。時勢に伏従するは。是れ時
 勢の奴隸にして時勢に搖動せらるゝもの。當さに時勢と共に生死
 すべしと雖も我が自己と共に生死すること能はざる僕流にして。
 固より賢を以て呼ぶに足らざるなり。予は寧ろ賢者は時勢に反す
 るものなりと謂はん。時勢固より知らずんばあるべからず。
 然れども其之を知るは只是れ其左右を明かにして自ら自身を顧
 るの勞なるに過ぎざるのみ。有鷹の動物安ぞ其趨勢に倣ひ之に隸

伏せんとして爲めに之を知らんと要するが如きことあらん。動か
 んと欲して獨り自ら動き爲さんと欲して獨り自ら爲す。其手足の
 至る所崩乎として時勢を打靡し去つて。朗洞として障碍を見ず。
 是れ此を偉人英傑といふ。
 或は曰く。英雄の動くや偶然にあらざして。必ずや其因を時勢の
 傾趣に發す。故に英雄は時勢に由つて造られたりと。果して然ら
 ば時勢の趣く所之に遇するもの擧げて皆英雄を成す乎。癡退衰亂
 の境に接して奮慨するもの何ぞ悉く英雄と成り得ざる。時勢の與
 ふるものは英雄の事業に過ぎずして英雄は時勢の造る所にあら
 ず。彼れ英雄は其動く所其力の及ぶ所強大にして毎に能く死地に
 生を現じ敗地に勝を擧げ既流の時勢を轉回するが故に。英雄には

必ず兩様の時勢を伴ひ必ず毎に其間に立つ。これ特種の時勢が須
要的の特種の英雄を産したるが如き観ある所以なり。

蓋ふに。時勢は吾人に所對すべき力にあらざして。吾人が動靜の
影相たるに過ぎざるものなれば。之に向つて進退の交渉を爲さん
とするは抑も是れ陋の限りにして自痿の小漢たるを免れざるもの
ならんのみ云々。

志を立つて事を爲さんとするには一心不亂でなくてはならぬ。一心
とは一向惠念である不亂とは不念不動である。一切外界の刺戟に應
動せずして其事其業に當中して油断がない。是れ即ち一心不亂であ
つて所謂禪門の工夫である。

繪畫といふに就ては殊に禪の趣が深い。雪舟、明兆、探幽、などの

繪畫の一種の奇彩神韻を有して居ることは。常人底の五十六十年
月を積んで習練しても及ばぬ所である。或はかくの如きはこれ天稟
のみと謂ひ去つてすまして居るものもある。すべてこれ天稟といは
んには出来ぬものが書を習ふことは先きの知れたつまらぬとじや。
天稟もあるではあるが習練の効果は空しからぬのである。其の習練
も一様の技倆は器械的の稽古でよからうが。神に入り妙を極むること
とは手の先き鼻の先きの替古では駄目である。須く心神を驅つて筆
外の筆色、景外の風氣を現成せしめねばならぬ。

久保田米僊曰く。(上畧)禪理の活法に機自ら動き手と心の相應す
る時は。我たるもの既に無し。かくして一揮物象を描き得て眞に
迫るを致すなり。云々又曰く。書はよく心情を動かす。神意を和

衷せしめざるべからざるものなれば。時々の好尙に應じ。嗜好の
 變遷に伴はざるべからざるものなるも。畫家たるものは寧ろ其の
 世代を左右し。好尙を移植するの力量なからざるべからず。云々
 繪畫の巧妙は實に心身相應、畫と人と不二の境にあるのじや。され
 ば河鍋曉齋は人と争ひて家に歸り怒氣禁ずる能はざるべき。機失ふ
 べからずとて紙を暢べて妖怪鬼神の繪をかきたりといふ。また雪舟
 は山水風月を畫くや必ずまづ香を焚き茶を喫し。洞簫を吹き詩を吟
 じ興將さに至りて即ち畫く云々。こは技術の上に就て純一無我即ち
 明鏡止水の機用であるが。尙ほ文學家が一般に詩美に對する主客の
 ことを。曾て記述したことがあつた。是も同じく參照として掲げま
 しやう。

不生不滅

夢窓國師

いづくより生れ來ることも無きものを

かへるへき身を何になけくらん

教外別傳

道元禪師

あら磯の波もえよせぬ高岩に

かきもつくへきのりならばこそ

○大詩人

附理窟と文學の事

物ありて心を刺戟し。心があつて能く物を知る。この心の智は其
 の物の理に對し。この心の情感は其の物の風趣に對することであ
 る。故に智を以て森羅萬象を觀るときは萬象が悉く道理の中にあ

黄檗運禪師、嘗て南泉を辭するのとき、南泉之を門送りし其笠を提起して曰く、長老の身材大にして、而して笠子過小也。黄檗曰く、笠子小。雖大千世界すべてこの裏にあり。



る。情感を以て森羅萬象に對すれば萬象彩然として風趣が具つて居らぬものはない。かくの如く智は元來物の關係を知るにありて情感はその風趣を感受するにあり。そこで甲は人の想中に入つて理論となり理想と成ずる。乙は人の想中に入つて詩想となり詩觀を成ずる。理想を以て萬象を成敗せんとする者は所謂智力家に屬して哲學の類を爲す。詩觀を以て萬象を取捨せんとする者は所謂情感家に屬して文學の類を爲すことである。理想を得ざる哲學者は。ちやうど眼鏡を失ふた近眼者の様で。視ることが物に格らぬ。とてもこの輩に物々事々の關係を抽し來ることは出來ぬ。詩人文學家美術家も亦同一束じや。詩觀がまだ成じて居らぬ文學者或は詩人はとても萬象の風趣に通ずることはで

きぬ。まして理窟の上のことを情感で判断したり。風趣詩美に對するに理窟の上で沙汰をするが如きは。ともにこれ大間違ひといふものである。

情感の支配を受けて理窟を捻り出す哲學家があると同じく。理窟の井に墮在して風趣詩美の沙汰をする文學者美術家が多い。尤も理窟附きの主人乃至但し書きの附いた美術などは。今に始まつたといふ譯でもあるまいが。とにかく今は益殖へて見へた。近代何ぞ大詩人を見ざるや大美術家を出さざるやとの嘆慨は一時四方に湧いたことである。然るに今や其大の字を冠る様な者がないのに其嘆慨の聲も消えてしまつた。

物が革るときは必ず覆倒の相を現すとある。たとへば春林の翠

緑はその前必ず秋克の枯骨の相を現したることの如く。また其の覆倒するや必ず上が下になり下が上になる如く相反の相を現すとある。今は寔にこれ詩人と哲學者美術家と理論家と覆倒の時代なるべし。文學家美術家としては必らず相應の理窟を鳴らし。理窟を言はぬものは氣の利た文學者美術家でない様になつて。却て哲學者といふものが一種の苦樂感に支配せられ。相應の我觀に沈吟して居るときは。そもくこれ秋春覆倒の兆候であらう。(中略)

情感の本性は竟に苦樂の二趣に歸すべしと雖も。其性状は喜怒哀樂愛憎等である。この喜怒哀樂愛憎等は有血動物が動機の本として其行爲の都てを支配するの力がある。人が一切の動作は此を離れては遂に得べからず人生貴要の事態は實にこの喜怒哀樂愛憎

の六情感を以て最一なりと謂ふべし。

所謂詩人文士はこの情感に生れこの情感と交沙するものだと言ふからには。其當路頗る重要にして其職甚だ難大なりと謂はねばならぬ。また詩人——文學は丈夫の以て生命とするに足る底の仕事であるといつても不可はない。何とならば。詩人文士は其最一として有力なる喜怒哀樂愛憎の支配を脱して却て之の中に於て自在を得たるものであるからである。彼は實にこの情感の中に生れて其の情感のために漂さることなく醉さることなく。之と交渉するに自在を得たるものであるからである。人の作業は結局して眞善美の三をいはずといふ。文學は果して其何れに歸すべきものであるかといふに。眞は道理の上に成り。善は關係の上に成り。

美は感受の上に成るとせば。文學は即ち其美に歸するのである。また感受は畢竟して苦樂の二趣に過ぎずとせば。美は其の樂と一致するものであろう。樂に基きて之が差配をすれば。人は悲苦の境を棄て、喜樂の境に就かんとする通性によつて。文學は其の喜境を開き其樂境を索するものである。

然れども。その喜だの怒だの苦だの樂だのといふが果して外界の境裏に性來して居るものであるや否。若し外界の性來するものとして。之を境裏に詮索せんとしたならば。是れ所謂哲學者が道理の眼を以て是非の差別を査究すると異らぬこととなつて。予の謂ふ所の文學者の所作ではない。

思ふに理窟を免れない文學者流は。かゝる哲學者の所作にいで。

その詩美風趣を外界境界の性來なりとして。之を詮索すること
 は。ちやうど物理學者の物品に就而種々の試験を爲すが如く仕來
 りたるのであろう。果して然らばこれ境界の奴隸、所觀の亡者
 なる箱庭文學者となるは道理のことである。予の所謂文學とは。
 境界の萬象を己れが美情に化し來る。事物雜多の境界を人の美情
 に一致せしむること。といふのである。怒つて四方を望めば山川
 悉く怒り。哀んで空を仰げば雲亦哀む。とは彼の文學者が套語で
 ある。詩人の眼裏詩にあらざるはなく。文學の念頭往くとして非
 文學の障礙あるべからず。視る所のもの悉くこれ文學。言ふ所の
 もの悉くこれ詩。其氣發して山川を動じ、其聲いで、俗態を醫す。
 是の如きを大詩人といふ。徒らに文字などの上に拘りついて。自

己がみづから美情のものならぬに。之を強て天地に求め。かつは
 人の情感を動かさうとは以ての外の大間違ひである。(下略)

一般に美術といふことも之に準じて知らるゝことである。詩歌俳偈
 の妙は其言ふ所の境の美しく雅なるが爲めではない。其言ふ所の心
 さまの美しく雅なるを稱するのである。詩歌俳句を讀みてこゝろよ
 きは其作者が心さまに同感を起してあのれも亦其心地となりて微妙
 の感をなすにあり。同じき梅同じき鶯、同じき春をば其作者の心さ
 まに隨ひてさままゝに作述す。その上に巧拙妙否がちやんと備つて
 人をして妙感止む能はざらしむるもあり。嘔吐を催しつべき程のも
 あるべし。さればその妙否巧拙は梅や鶯や春やの爲めにあらざして。
 全くその之を吟じ作しする人の心さまにあることが分る。であるか

ら古より名人と謂はるゝ者は醜状を吟じて却て美状となし。殺風景を奇麗風雅に詠むことである。しかるに心さまの雅ならぬものは如何に雅妙の境界を詠んでもやはり無風流となつてしまふ。是に由つて眞の文學者は其醜美雅否を物に求めずして己の心地の上に養ふことが。其當然であるとわかるであらう。之を心地の上に養ひ得ば梅でも棘でも雨でも雪でも皆其心に照せば詩となり歌となり俳句となりて皆高品雅趣を躰せざるはなしである。其心の修養は即ち禪である。之を心の上に得たるものは物に當つて當意即妙である。どういふふたら美になるであらう如何に言ふたら風流であるだろうと兎角の苦心按配をしない。物に觸れて眞に之を縁として。心中無盡の美想中より湧出するのである。この當意即妙が即ち明鏡止水の大機

用である。

政治の目的は治國平天下である。政治の主旨は至公至平である。この主旨によつてこの目的を擧げんとするものは所謂政治家である。國家の現象は千變萬化であるに其目的は只一の（治國平天下の精神に合ふ）といふ同等純一の事に歸するのである。故に政治家は其千變萬化極むべからざる現象を夫々相應臨機適宜の處置をなして。悉く之を治國平天下の精神に適合せしむべくせねばならぬ。徒に妄斷の死矩に偏つて其處置を爲したならば。弊害忽ちに生じて至公至平の主旨に反り。隨つて治國平天下の目的にも遠かることとなる。たとへば自由といふ唱譽は專制に對しての與藥底のことに過ぎずして之を治國の眞理とすることは出来ぬぞ。すべて斯の如くである。

其機其時に應じて其用其値があるので萬世不易の主義といふ死物に凝つては活きたる國家の養育は出來ぬ。其機に應じ時に合して活動活用自在の働きを要するは最も政治家に於て其切なるを見る。また不偏不着至公至平己を主とせず人に隸せず只管國家の事に當るといふこと。即ち明鏡止水の如く一片の塵穢を止めず來影に好厭の沙汰を爲さざる機用も亦最も政治家に重要なることである。この不偏公平臨機自在は即ち所謂禪機にして他に求めて得る能はざることである。禪學といふことは坊主ばかりの持ちものではない。國家の棟梁なるものは須くこの禪機徹底の漢でなくてはなるまい。すでに國を治むること然り。家を治め身を治むること亦復かくの如し。しからは商事はどうであるかといふに。是亦悉く禪機ならざるはな

しである。之が儲るであろうイヤこの方が儲るナニ之が好あれが好いて。迷ひに迷ふた時は必ず失敗する。その迷を一層深くして如何にも才智を悉くして物の理事のすべを極め盡したる心地で。所謂苦策計案することが往々であるが。サテこの苦策のあてにならぬことは。無徹法のあてにならぬと同様でツマリ苦心してあてにした丈けが結局の損じや。商業失敗の原因として最も著しきことは。なまじひの道理をつけてキツト可かろうと考へたことである。却つてドウか〜と思ふたことが大利がある。しからは商業はドウか〜とあてにせぬ事が秘訣であるか。または無考無計算無徹法がよろしいの乎といふては困る。そこがやはり臨機應變でなくてはならぬ。古の人の言ひ草に「人間は運、根、鈍、である」とある。運とは天運の

こと根とは根氣とらふこととて一向専念といふこと。鈍とはボンヤリして小才覺や小智術の無いこと。古來致富の豪商が傳記を考へるに皆この運、根、鈍、の三つで成り立つてある云々。これも正しい觀察では勿論無いが。しかし其鈍といふ所に妙旨がある。鈍といふて機に接しても何ともせぬ様な木石同様の愚鈍をいふのではない。機にあらざれば動かぬさまが鈍の如くといふ意である。しかるに生才智のあるものは機會にも變革にもそれにかまわず才能智術を逞くして利さうとするから却て利に遠かつて損失を招くことになるのである。尤も鈍者はその來るべき機をまつて居る、猿の蚤とり眼となつて來機を待つて居るといふのではない。機が來れば即ち自ら應ずるのである。權助と呼ばれて直にオと返辭をする工合である。之

を權助が蚤取り眼や切つ立て耳をして呼んだら返辭を仕やうと待ち構へて居ると思ふと間違ふ。明鏡止水の應機自在は實にこの權助と呼びオと答ふる底と異らぬのである。故に商家はこの事は利ありこの事は利なしと利損を其事其物に歸して拘み片寄りたる心あれば。必ず大利を博することはならぬといふ。固より利損は其事其物にあるのではない。只之をして利あらしむると損ならしむると。之を取り用ふる方にあることじや。如何に廢りたるものも亦廢物利用の途さへありて。時に當つては大有用と變ずるのである。當に知るべし。商業の秘訣妙旨も亦この禪機に外ならざること。次に醫師などは全く天具の藥能を借つて正確の現象に據つてすることだから。いつもく其症にして其藥其治術と定まりて別に禪機な

んといふことに關係はあるまいといふに。否々醫師などは特に禪機にあらざれば治積の妙巧を擧ぐることはできぬ。千變萬化靈活の人間をソンの死矩死繩に押しあてられては大變なことになるつてしまふけれども。醫者に無考無心で手當り放だいに臨機應變をやられたらソレソ大變ではあるまいかと心配をすることであらうが。固より手當り放第の無徹法ではならぬは勿論であるが。その無念無心でなくてはならぬといふは醫師に聊かの妄想邪心なきことである。患者を診断するにも恐くはこれ何病ならんといふ妄想があつたならば正しき視察の眼が狂ふ。自ら岐路に迷ふて決せずして遂にはソノ恐くはの附てをる方の處置をやつて見るなどいふことになる。醫師の重とする所は診断である。診は其症證を徴することですマリ様子

を調べることじや。断は判断で判定断決することじや。この診と断とが學問の沙汰の様に旨く手輕の比例にでもなつて居ればよいが。實際はなかくに綜結して千象萬種じや。随つて似類相近が頗る多い。診断の難きは實にこゝにあるのじや。明鏡止水底の大至公平の心に訴へねばならぬはこゝである。亦この他に於て數多の患者を取りあつかふ中には。小兒もある婦人もある。習慣もある特性もある。この間皆千狀萬態の活手段が必用である。醫術の秘要も亦復禪機を外ることはない。然らば工業工作乃至發明等の器械的のことは何うじやといふに。之も亦其奥妙は悉く禪である。工業工作乃至發明の要髓は意匠工風といふことである。この意匠工風といふことが己の外に求むべきもの

でない。この心の中より流出するものであるから意匠を凝らし工
 風を案ずるといふが。心に偏依執着する所があつては決して明案
 の出るものではない。
 音楽歌舞の戯技に於ても亦然り。其奏曲する所乃至歌舞する所と我
 と不二となつてこの間一念の差別なくして始めて神妙に至ること
 ある。此等の事は委しく不日稿を起して古人の實跡に徴し『技術禪
 學』と題して記述するつもりである。

如何佛 (道詠集)

道元禪師

いかなるが佛さいけて人さはい

夏火やかもしに氷柱ぬにけり

第十 禪門の本旨

○佛境界
 ○以心傳心

さて。本書を讀む人。ウツかり誑らかされてはならぬぞ。否こちら
 から讀者を誑らかすのではない。讀者みづからが誑かさるゝのじや。
 禪門には決してく學術技藝や世間渡りの資けとなる様な傳授は一
 つも無いぞ。おのれの専門の仕事にも少しは益になりさうだから禪
 學を聞いて見やうか。禪學をやると意志の力が強くなつて萬事に都
 合がよいからやつて見やうか。などといふ根性の者に禪學の成就は
 ならぬ。禪の本義は無所得である外に對して不可得である。内にも
 外にも不可得となつて即ち自性清淨の三昧を成ずる。内外不可得の

まゝが佛の内證傳授ないしやうもんじゆ。言説念想ごんせつねんさうを離れ傳ふべきもなく受くべきも無い。即ち以心傳心である。心に得る所無く境まが(心に對する世事世物)にも得る所無きが故に明鏡止水の如くである。明鏡止水の如きが故に美術に入つては其神を開き。劍道けんどうにあつては其妙を極め。乃至一切の作事さくじ所業さくげに在つて神妙ならずといふことなし。しかるに若し其効果の境處きやうじよ、即ち禪學を利用して一番大儲けをしてやらうといふ大儲けの所得の的があつてはハヤ禪に遠かつた證據しやうこで。千萬年を費しても成就する筈が無い。もし果してよく禪に入つて其効果を期せんとならば。一切の希望きぼうを截斷せつたんして身命みんめいを擲棄ていししてかゝらねば駄目じや。よく是の如く禪に入らば即ち真髓しんずいを獲得くわくとくして。天地一法てんちいつぽうの所得なし之を所得と名く。天地一法の棄つべきなし之を無法と名く。煩

腦即菩提、生死即涅槃、我元來生れたるにあらざ死して往くべきにあらず。而も生死なきにあらず。云々の大智眼を開き。三千大千世界に於て遊戲自在ゆうけいじざいならん。一切學術の奥妙も技術の神巧もこの上に自らあらはるゝ光明こうめいである。

初心禪學修行の歌 (四部の録)

◎尋牛 (一)

尋ね入る牛こそ見えぬ夏山の

梢に蟬の聲はかりして

▲牛は我人の本心にたさふ

▲山は世の中

▲蟬の聲は妄想煩悩なり

◎見跡 (二)

おほつかな心つくしに尋ぬれば

行くとも知らぬ牛のあどかな

▲トリトメもついなながら牛(本心)のあどあつたよな

◎見牛 (三)

ほへけるを知るべにしつゝあら牛の

かけ見るほどに尋ぬきにけり

▲ほへけるは吠へたる聲なり諸の經驗や祖師の垂示などないふ

▲あら牛はヤゝともすれば狂ひ出しさうな牛(本心)

◎得牛 (四)

捕り得ても何かと思ふあらうしの綱ひくほどに心つよきよ

▲捕へ得ても修行工夫の力でひきさめて置ければにげ去らるゝぞ

◎放牛 (五)

日數へて野飼ひの牛も手馴るれば

身にそうかけと成るぞうれしき

▲牛の手馴れて自在に身に隨ふのさま

◎騎牛歸家 (六)

かへりみる遠山道の雪きえて心の中にのりてこそゆけ

◎忘牛人存 (七)

よしあしとわたる人こそはかなけれ

一つ難波のあしと知らずや

▲眞の悟り開けぬれば悟りといふも猶し煩惱の一つである善もなく亦惡

もなし

◎人牛俱忘 (八)

雲もなく月も桂も木もかれてはらひはてたるうはのそら哉

▲迷悟なく生佛なしといふもまたくまごころなりぬぞ

◎返本還源 (九)

法の道あとなきもとの山なれど

松は緑に花はしらつゆ

▲無一物皆空即柳は緑花は紅

◎入塵垂手 (十)

手をたれてあしはそらなるをどこ山

かれたる枝に鳥やすむらん

▲大機大用

禪學通俗談

終

明治三十三年八月十五日印刷

明治三十三年八月二十日發行

正價拾八錢



東京市京橋區中橋和泉町四番地

發行者 奧村金次郎

東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷者 石川金太郎

東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市京橋區中橋和泉町

發行所 藍外堂書鋪

發賣所 東京

神田雉子町 岡崎屋
同表神保町 東京堂

都京

佛光寺通東枝 大阪備後町吉岡
三條通出雲寺 名古屋門前町其中堂

子爵本莊宗武君題詠 平山省齋先生題字 近藤嘉三先生著

○心理魔術と催眠術 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢

長春園主人近藤嘉三先生著

○幻術の理法 附神と幽靈 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢

菅原如庵 加藤孤鴈兩先生合著

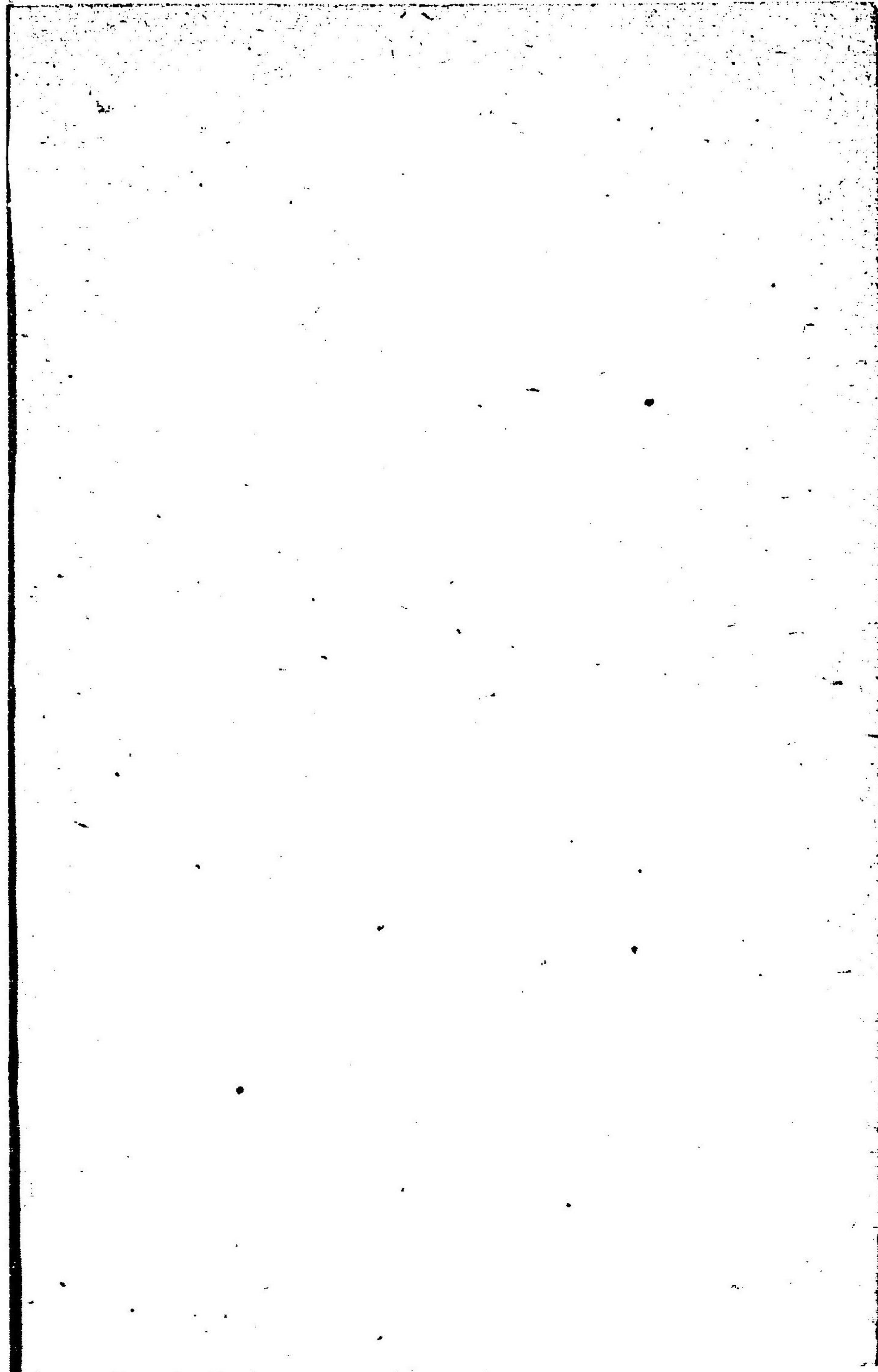
○人心觀破術 附天稟と運命 密書挿入頗美本全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

石川鴻齋 土田淡堂兩先生序并評

内田彌八君著

○義經再興記 密書挿入頗美本全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

附錄 義經遠征考



欠

MISSING

子爵本莊宗武君題詠 平山省齋先生題字 近藤嘉三先生著

○心理無用**魔術**と催眠術 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢

長春園主人近藤嘉三先生著

○**幻術の理法** 附神と幽靈 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢

菅原如庵 加藤孤鴈兩先生合著

○**人心觀破術** 附天京と運命 密書挿入頗美本全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

石川鴻齋 土田淡堂兩先生序并評

内田彌八君著

○**義經再興記** 密書挿入頗美本全一冊 正價廿五錢 郵稅四錢

附錄 義經遠征考

○和漢
泰西譬諭と俚諺

近刊

○仙術と忍術

同

○和歌と
都々逸と
卽席轉作法

同

○其他逐次珍書發行

京橋區中橋和泉町

東京書肆

藍外堂

奥村金次郎

喝